アズールレーン・キュービック

タク@DMP

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「目を疑った。あの艦船プラモデルから、本当に少女が出来てしまったというのか」

時は現代の日本。横須賀に住む艦船オタクの少年・蒼颯は、ある日三笠公園で「三笠」を名乗る女性と出会う。それを皮切りにして、日本とは似て非なる国家・重桜の艦隊が襲撃するが、誰にも見えない艦船に誰も抵抗することが出来ない。対抗できるのは、少女の姿をした「ＫＡＮ―ＳＥＮ」と見えざる船舶を視る事が出来る「指揮官」の適性の持ち主のみ。少年と少女、指揮官と艦船が織り成す海戦ボーイミーツガールが幕を開ける！

目次

第一話：決起 ―― 1
第二話：艦隊激突（前編） ―― 80

第一話：決起

何の為に生まれて、何の為に消え逝く？
同じことを繰り返しているうちに、運命に問いかけるのも、もう止めてしまった。
これで何度目かは分からない。
分からないが、水面に光がある限り私達は、あるいは僕たちは、あるいは俺達は、何度でも手を伸ばすのだろう。
もう、何度目か分からない繰り返しを四角い器に託す——私達が求めた蒼き道を駆ける為に。
「此処は、何処だ？」
水柱が上がり、火の粉が飛ぶ。
海は荒れ狂い、鉄の塊を次々に飲み込んだ。
轟音が轟く。
黒く染まった水面が燃え上がる。
断末魔、悲鳴、助けを求める声。
それが聞こえては消え、聞こえてはまた消えた。

「――」

掠れていた。

だけど誰かが自分に問いかけているようだった。

でも、何も出来なかった。

海に飲み込まれていく無数の艦船、無数の飛行機。

荒れ狂う炎と波を唯々呆然と眺めている事しかできなかった。

「私ハ、誰？」

燃え盛り、溶解した甲板の上に立っていた。

自分でさえも何故生きているのか分からない。

だけど、彼女は確かに自分の前に立っていた。

姿は分からない。朧げだ。何者なのか、そもそも誰なのか、こちらが聞きたいくらいだ。

しかし、何故か恐怖も躊躇も無く、迷わず手を伸ばしていた。

「君は一体――」

●一

「……あ、しまった」

目が覚めると、視界にはまだ完成していないプラモデルと、削りカス、多くの器具が

視界に広がった。

細かい作業が多かったので、疲れと一緒に眠ってしまったのだろう。

時計を見ると、もう夕方に差し掛かっていた。折角の休日を居眠りで潰すのは、良しとしなかった。

丸椅子を百八十度回転させると、部屋の壁を隠すように並べられた三段ステンレスラックが目に入る。金網の上には、海を模した青いマットが広げられており、今まで作って来た数々の艦船模型が静かに佇んでいた。

整然と綺麗に並べられたコレクションスペース。そこに加わっていく作品を眺めて、過去に起こった海戦や、有り得たかもしれないしあるいは有り得なかった海戦（ロマン）に思いを馳せるのが好きだ。

そして目についたのは、ぽっかりとスペースが開いている第三水雷戦隊。そこに、今作っている駆逐艦を飾れば、史実の戦隊を構成していた艦船を揃える事が出来る。

此処までやったからには、中途半端で終わらせたくはない。改めて眺めると、駆逐艦特有の先鋭としたフォルムには惹かれるものがある。

「……っはぁ」

大きく溜息を吐くほどに、うっとりしていた。このまま悦に浸っていたいくらいだが、未完成のプラモデルを何時までも放置しておくわけにもいかない。

「やっぱこの曲線美だよ、曲線美。特二型はこうでないと……」

傍から見れば唯の危ない人であるが、自覚がないわけではない。他の男子が女子の曲線美に夢中になっている間、艦船の曲線美に夢中になっていたような男である。興味が無いわけではないが、今更色恋沙汰と縁があるとも思えないのでハナから諦めていたのだった。

さて、昔から刀剣や銃器のように人を殺せる物には美しさや魅力が伴うと言われる。艦船も例外ではない。

何故人は凶器や兵器に惹かれるのだろうか。俺がこうしてプラモデルを作り続けるのは、その答えが何となく見えそうな気がするからだ。

今まで答えが出てきたことなど一度として無いのであるが。

とりとめのないことを考えながら接着剤を手に取った。もう空だった。

そういえば此処しばらく買い足していなかったことを思い出す。

時計を見ると、午後の四時。暗くなる前に買いに行かなければならない。

そう思った矢先だった。鞄に入れているスマートフォンから着信音。

誰だろうか。こんな物好きに、わざわざ休日の合間を縫って電話をしてくる人間もまた相当な変わり者に違いない。

「もしもし？」

スマートフォン越しに女の子の声が間髪入れずに返って来た。
「ぷらも屋カゲロウでございます」
「ああ、ぬいさん。どうしたの？　仕事中に電話なんか掛けてさ」
「そろそろ接着剤が切れる頃合いだと思いまして。ふふふ……お安くしておきますよ？」
ぬいさんは知り合いのプラモデル屋・カゲロウの店番だが、口ではいつも「値引きもしないし贔屓もしない」と言っている。
値引きをする時は、決まって腹に一物隠している時だ。
「何か隠しているでしょ？」
「まさか。ぬいの商売は何時も清く正しく、でございます。早くしないと売り切れてしまいますよ？」
「いや、そうだけどさ。いつもは『割引？　そんなものはありませんよ……』の一点張りじゃない」
「ともかく、早く来る事をお勧めしますよ。よしなに……」
そこで電話は切れた。
ぬいさんはいつもこんな感じだ。決して多くは語らない。
嘘は言わないが本当の事も言わない厄介な人なのだ。

とはいえ、接着剤を切らしたままにしても仕方がないので、座り過ぎで痛い腰を上げて外に出向いたのだった。

●二

「ほう……やはり冷え込む秋には、こぶ茶が一番でございますね」

おかしい。何故、お客さんであるはずの俺は来店早々ぷらも屋カゲロウのバックヤードで在庫整理を手伝わされているのだろう。

店内はおもちゃ目当てでやってくる子供で賑わっていた。

俺はと言うとプラモデルの仕分けや不良在庫の確認をやらされていた。

当の店番はカウンターで正座して湯飲みでお茶を飲んでいた。いや、仕事をしろよ仕事。

「在庫整理が終わった後は閉店後の掃除もお願いします。塵一つ残さずに」

「ぬいさん？　俺、接着剤を買いに来たんだけど、何でタダ働きさせられてるんだ？」

彼女はもう一度湯飲みに口を近づける。

心底呆れた様子でダンボール箱を持ち運ぶ俺を流し見た。

「美味しい話には大抵裏があるものでございます。十六年生きて、まだそんな事も分からないのでございますか」

「うぐ、その点に関しては反論したいけど反論の余地が無い」

「そして割引に釣られて、のこのことやってくる。全く、この大うつけは……」
「ああ、そうだろうな。だけど、それは少なくともサボってる側の台詞じゃないよね！」
黒髪のおかっぱに、赤いカチューシャを付けた市松人形からは毒舌が次々に飛び出す。
幼く見えるぬいさんだが、俺よりも余程肝が据わっていて商魂もたくましい。
駄菓子屋を改装した古びたお店の店番は、亡くなった先代のお爺さんから三年前に継いだらしい。
俺はよく此処に通うが、生活事情を始めとした彼女の事は何も知らない。
そもそも成人しているのかも怪しい。
お爺さんが店番をしていた頃も度々見掛けていたが、彼がぬいさんを孫と呼んだことは一度も無い。
「バイト代くらい出るでしょ、この仕事の内容は」
だが、彼女が店番になってからはこうして手伝わされたりタダ働きさせられることが増えた。
当のぬいさんは澄ました顔で、「こども銀行のお札なら、幾らでもお包みしますよ」と言ってのける。
「あくまでも払うつもりはないのか……」

「その代わり、割引くらいはしますよ。接着剤に限り」
普段絶対にやらない割引にも、案の定裏があった。
隠すつもりも無かったのか、在庫整理をしていた時にその理由はすぐに分かった。
「接着剤が発注ミスで大量に届いたから、どうやってでも売り捌きたいだけだろ……」
「何のことやら見当もつきませんね」
事実を突きつけても、このふてぶてしさである。
素知らぬふりをして、ぬいさんはもう一度湯飲みに口を付けた。
要するに俺は良いように使われたのである。
「しかし、やはり大うつけでございます。そこまで分かっていたのに、わざわざこの店に来るのですね」
「それは……」
思い出の店だから、と言いかけたがそこで言葉は詰まってしまった。ぬいさんにそれを言うのは、何だか恥ずかしかった。
此処で昔店番をしていた爺さんは、海兵だった。船が好きで戦争の後も船の事が忘れられず、船乗りの仕事を定年で退職した後に始めたのがこのプラモデル屋カゲロウだ。
店には彼が作った沢山のプラモデルが飾ってある。一番の傑作は、見るも壮大な戦艦大和。

小学生の俺は、父に連れられて初めて此処にやってきた時、大和を見て真っ先に「おじいちゃん、俺、これが欲しい！」と言ったらしい。彼は笑って、「それは売り物じゃあないんだ。自分で作るものなんだよ」と返したのが懐かしい。

彼は親切に艦船模型の作り方や、飾り方を教えてくれた。父も一緒だったので、俺は大和作りたさに練習で小さな艦を作っていった。まあそれは酷い出来だったのだが、この店での経験はとても良い思い出だ。

お爺さんが亡くなった後も足を運んで、ぬいさんの無茶ぶりに答えているのは、この店との関わりを何処かで持っていたかったからだろう。

でも、ぬいさんにはそんな事を言うのは気恥ずかしかった。

俺の方から壁を作っていたのかもしれないし、彼女も陰気な性格もあって何処か踏み込み難さを感じていた。

だけど、爺さんの後継ぎである以上、俺もぬいさんを放ってはおけない。

付かず離れず。ぬいさんとは、そんな不思議な関係が続いていた。

「終わったぁ……」

接着剤を買いに来るだけのはずが、随分と長居してしまった。箒を持った手がくたくただ。

一通りの仕事を終えた後、俺は目当ての接着剤をレジに持って行った。

「んじゃあ、これ二個下さい」
「うふふ……プラモデル用セメント二個、毎度有難うございます」
　レジに映ったのは、十％引きにされた接着剤二個分の値段。しかも元々百二十円程の商品なので大して変わりはしない。
「……もう、お帰りになるのでございますか？」
「ああ。誰かが色々押し付けた所為で暗くなってしまったからな」
「それはそれは酷い事をする人もいたものでございますね」
　そう言うと、ぬいさんはレジ袋にプラモデルの箱を入れた。
　あまりにも自然な動作だったので、面食らってしまった。
「待って」
「うん？　何でございますか。妾は、この売れないプラモを押し付けただけでございます」
「俺、まだ部屋に積んでるプラモデル沢山あるんだけど」
「左様でございますか。……で、会計の方を……」
「買わす気満々かよ」
　箱を取って見た所、それは軽空母のプラモデル。そういえば、これはまだ組み立てて無かったな。実艦が小さめなのでキットもそこまで大きくはない。

だが、見た所「売れない」ようには見えない。新品だ。何故売れ残っているのだろう。
「で、値段の方は？」
「……九十％引きとかどうでございましょう？」
俺は耳を疑った。
「本気で言ってる？」
「妾は嘘は吐きませんよ。嘘吐きは舌を抜かれて地獄に落ちるのでございます」
少し決まりが悪そうにぬいさんは言った。
成程、そういうことか。
「へへへ……そっかぁ」
「……何でございますか。売れ残りを押し付けられたくらいで良い気になって……この大うつけは。物に釣られて無理難題を引き受けていると、そのうち痛い目を見ますよ」
当の本人がそう言うか。
だが、言わぬが花。今の俺は機嫌が良い。思わぬ収穫に顔が綻んだ。
「でも良いの？」
「妾の気が変わらぬうちに、持っていくことをお勧めしますが？」
「不良品とかっていうオチは無いよね？」
「その対応は妾ではなくメーカーの領分でございます」

少なくとも悪意は無いようだ。
「分かったよ」
色々問題はあるけど、多分彼女は素直じゃないんだろうな。
愛想が悪くて陰気で、そしてがめつくても人が店に寄って来るのは、ぬいさんの人柄もあるのだろう。
俺が良いように手懐けられているだけなのかもしれないけど。
結局、酷いタダ働きではあったが上機嫌で俺は店を出た。
「……これで良かったのでございますか」
彼女の最後の呟きなど、知る由も無かったのである。

●三

結局昨日は夜遅くまで起きて未完成だった艦船を完成させていた。
予期せぬバイトで疲れていたし、変な時間に居眠りした所為で夜眠れなかったのだ。
「もしかして昨日寝てないのか？」
「ああ、ちょっとな……」
見兼ねた隣の席の友人が声を掛けて来る。
英語の授業の途中でしばしば目を擦っていたからだろう。

東雲一馬は所謂悪友と言える仲だった。
物好きには物好きの類友が出来るものなのである。
もっとも、俺と違って彼はアニメやゲームに造詣が深いのであるが。
「もしかして昨日、クリッドマンの4話を見てた？」
「見てない。ずっとプラモ作ってた」
「……はぁーあ」
あからさまに馬鹿にしたような様子の彼に、少し苛立ちが募る。
「ダメだなあ、特撮をアニメに落とし込んだクリッドマンは今期の覇権間違いなしだぞ？」
これが、ついこの間まで特撮を子供っぽいから見ないと言っていた人間の台詞である。調子が良いとはこの事だ。
彼の譫言を聞き流しつつ俺は欠伸をした。
頭がぼんやりする。また昨日みたいに居眠りしてしまいそうだ。
「ああ、そうだ。お前知ってるか？」
「どうした。またアニメか？」
「違う違う。此処最近続いてる艦船沈没事故だよ」
「沈没？　……ああ」

「何かすっげぇ嫌そうな顔だな。船の事件なら全部面白がると思ってたんだが」
それを指摘されて、どきりとした。顔に出ていたらしい。
「……いや、何でもないよ」
昔の嫌な事を思い出しただけ。一馬はそれを知らない。
敢えて言って不快にさせることもないだろう。彼は悪くない。
平和な世の中で船が沈むことに、俺は人一倍敏感になっている……ただ、それだけだ。
「それで続けてくれ。一体今度はどうなったんだ？」
この間は客船、今度はタンカー。大型の艦船が次々に沈没している。それも立て続けにだ。
巷では大騒ぎ。政府は対応に追われている。
「今回のタンカーはインド海で沈んでるな。しかもまるで魚雷で爆発したような痕があるんだってよ。お前軍艦に詳しいなら何か分かるんじゃねえ？」
授業中だというのにスマートフォンを取り出し、一馬は囁いた。画面にはネットのニュースサイトが映っていた。
しかし魚雷痕、か。
潜水艦の仕業とでもいうのか。
……否。

「何言ってんだ……今日び無制限潜水艦作戦をやってる国があるってのか」
そんなことは有り得ない。きっと、爆発事故に違いない。
魚雷で撃沈されたのならば、恐るべき事態だ。
戦争行為も大概であり、国際問題に発展するだろう。
「まあそうだよな……だけど、船体にそれらしい痕跡があるみたいなんだよ。でも魚雷にしては小さすぎるらしい」
「何か別のものだろう。二次大戦の不発機雷とかじゃないか？　とにかく何処の国だろうが、潜水艦で一般艦船を撃沈なんかしたら国際問題だろうし魚雷はねぇよ絶対に」
そもそも、こんな事故が起こっていては船での輸送が滞るだろう。
海路が塞がれば経済的にも大打撃を被る。観光業界も大迷惑だ。
「コラ！　そこで何やってるの！」
考えを巡らせていると、身体がキュッと冷えた。
飛んできたのは先生の甲高い声。
一馬がスマホを使っていたのがバレたか、と思ったが違うようだ。
そもそもこちらは後ろの席で、教科書で隠せば教卓からは見えない位置になっている。
どうも、お調子者でクラスでも下ネタとかを言ったりする類のお騒がせ屋が落書きを

していたらしい。
　ノートを取り上げると、先生は大きな声を上げてしまった。顔が真っ赤だ。相当怒っているのだろう。
「何この落書き！　こんな、ちゅ、中学生みたいなひ、卑猥で下品な……！」
　いや、何かがおかしい。怒っているというよりは、恥ずかしがっている。
　身をよじりながら落書きを見ている姿は何処か悩ましい。
「なんで今の子はみんな変なことばかり考えてるのよ……！」
「あ、先生もしかして変な事ってエロい事考えてた？」
　先生は顔を真っ赤にして叫ぶ。
「考えてません！　貴方は、放課後補修です！」
「えぇーっ!?　そりゃねぇぜ、レン先生ェ！」
　それを見た一馬はにやにやと気持ちの悪い笑みを浮かべていた。
「いやぁ、良いよなあ、新任教師のレン先生。アメリカからの帰国子女でエリートで才色兼備。なのに、ちょっとむっつりな所が良いよなあ、しかもボン・キュッ・ボン」
「あんなんで大丈夫なんかなあ……」
　レン先生は今年この高校に着任した非常勤の英語教師だ。
　見た所、赤毛の目立つアメリカ人に見えるが、ハーフであるらしく日本語が堪能であ

る。

だけど、生徒にイタズラされてムキになるなど、新任であるのもあってか威厳は微塵も無い。

そして、グラマラスな体形と脳内ピンク気味なのが災いして男子生徒からは専ら「絶対にエロい」との評判だ。

流石に教師で妄想するのはどうかと思うけど、正直先生が誤爆して墓穴を掘った事もあるので一概に彼らが悪いとも言えないのである。

とはいえ、教師としては間違いなく優秀だろう。親身な性格だからか、女子からは人気だ。男子にからかわれるのを可哀想に思う生徒もいるという。

「一馬も、あんまりレン先生を虐めすぎるなよ……」

「え？　そういうお前はレン先生が好きなん？」

「人間としてね。生徒は絶対に見捨てられないタイプだからさ」

「ほーう、上手い切り返しだな」

「わざわざ補修までしてくれるんだからさ」

「まあ、お前昔から人を見る目はあると思うから合ってるとは思うぜ」

彼は一定の理解を示してくれたらしい。人を見る目がある、か。自分ではよく分からなかった。だけど、頑張っている人は放っておけないだけだ。後で慰めの言葉でも、レ

ン先生に掛けておこう。
「てか、そろそろスマホ直しておけ」
「ああ。見つかったらヤバいしな」
言って、一馬がスマートフォンをポケットに仕舞った。その時。
甲高い通知の音が鳴った。クラス全員の視線が今まさにスマホをポケットに入れたばかりの彼に注がれる。
彼は思わずスマホを見た。今見ていたニュースサイトが更新されたらしく、そのたびに通知の音が鳴るようになっているようだ。
しかし、本来ならば授業中にスマホの持ち込みはご法度。朝のＨＲの際に貴重品は回収されることになっているのが、此処の校則だ。
「おい見ろよ！　今度は漁船が沈没したってよ！」
「お前……やっちまったな！」
自分が危機に晒されている現実を直視出来ないのか、逃避するように彼はニュース記事を読み上げた。
成程、確かに船が沈む事件は深刻のようだ。しかし、これは流石にヘマでは許されないぞ。
「じゅ、授業中にスマホを持ち込むなんて！　どうせまたいやらしい動画でも見ていた

んでしょう！　東雲君は放課後補修です！」

向こうの席から「何でそっちの方に発想が飛躍するんだ……」と声が聞こえてきた。俺はあたかも他人事のように頷いた。しかし、それを東雲が見逃しはしなかった。

「先生！　こいつも一緒にスマホ見てました！　同罪です！」

「はぁ!?　お前……！」

そう言って彼は俺の手を掴んだ。これが友のすることだろうか。

確かに授業を聞かずにスマートフォンを覗き込んでいたのは無罪とは言えないが、あっさりと友人の命を売るのは薄情だろう。

「そうですか、では貴方も補修です！」

「……」

俺はさっきの男子生徒の気持ちが、今なら少しだけ分かる。

「レン先生、そりゃねぇぜ……」

●四

横須賀は港町だ。かつては帝国海軍の鎮守府が置かれていた場所でもある。今は海上自衛隊の横須賀基地や米軍の横須賀海軍施設ドックが置かれており、軍港としての役割は継承されていると言える。

だけどやはり港街の夕陽は綺麗だ。海に夕陽が沈んでいく。

だが、今日に限っては俺の気分は沈みっぱなしだった。此処最近、貧乏くじを引いてばかりだ。好事魔多しって言うし、割引に応じずにプラモデルのお金払っておけばよかったと思う。

「いやぁ、案外早く終わって良かったなあ」

元凶があっけらかんと言った。

何事も無かったかのように鞄を振り回す。危ない。

「それでどうする？　どっか寄って帰るか？」

一馬は補修を受けて怒られたというのに、もう明るい調子だった。このポジティブさは素直に尊敬に値する。

俺はと言うと、沈んだ気分を何処かで払拭したかった。いつもならカゲロウにプラモデルでも買いに行く所だが、生憎部屋にはまだ開けられていない箱が沢山ある。なら、学校のすぐ近くに俺の好きな場所がある。

横須賀は他にこれといった観光名所はあまり無いのだが、これだけは譲れない場所がある。

「戦艦に乗ろう」

ぱっと聞けば突飛も無い言葉に聞こえたかもしれない。

だけど、同じ町に住む者同士何のことかはすぐに分かったようだった。

学校から歩いていくとすぐの場所に戦艦は物言わずに佇んでいた。

「よう、また来たぞ、三笠！」

俺は呼び掛けた。相も変わらず寂れた公園だ。でも、それが却って俺だけが独占出来る場所のようだった。

日露戦争の連合艦隊旗艦にして殊勲艦。そして、記念艦として日本に唯一現存する戦艦だ。

「お前も好きモノだよなぁ、相変わらず。こんなところ、軍艦がよっぽど好きな奴でもない限り訪れやしねえのにさ」

「それでも俺にとっては大事な場所だ。三笠は日本に現存している最後の戦艦。そこに意味があるんだ」

全長百三十一・七メートルの小さな戦艦だが、俺達を見下ろすかのように鎮座した三笠からすれば俺達は豆粒のように小さい取るに足りない存在なのかもしれない。

俺はそこに、決して人間では踏み込めない神秘的なものを感じた。例え、それがかつての船そのものではなかったとしても、確かに三笠は九十年以上もの間にそこに居たのだ。

人間と同じように、姿形を時代を経て変えながらそこにあった。俺は、そこに親近感を覚えたのかもしれない。

艦橋を見上げた。かの海軍司令官は、日本海海戦であの一大決断を断行した時、何を思ったのだろうか。思いを馳せれば止まりはしなかった。

「……あれ？」

俺は気付いた。いつもなら誰も居ない艦橋に誰かが立っている。

白いマントが先に目についた。そして、次に目に入ったのは黒い軍服だった。自衛艦の人だろうか。眼を凝らすと女性のようだった。

「どうしたんだ？」

「いや、珍しく女の人が居てさ。もう、とっくに観覧時間は終わってるはずなんだけど」

「はぁ、何言ってるんだ？　誰も居ないぞ」

「……え？」

俺は耳を疑った。東雲には見えていないというのか。

「あの艦橋の上に人が立っているじゃないか」

「あの、って何処だよ。甲板にも艦橋にも人なんていねぇぞ。お前、プラモデルの作り過ぎで目が悪くなったんじゃねぇのか」

「いや、でもスマートフォンにも映っているぞ？」

「何も居ねえじゃねえか。悪い冗談はやめろよ」

カメラ機能を起動した俺のスマホには、確かにその女性が映っていた。だけど、一馬

には何も見えていないようだった。
幽霊でも見えているというのだろうか。
そんなはずは無い。俺にははっきりと見えている。マントは風に靡いており、確かにそこに立っているのだ。
「……付き合ってらんねー、疲れてるならさっさと休めよ」
「いや、でも、確かに俺には見えて」
「俺もう帰るわ。また明日な。幽霊とか気持ち悪いしよ」
そう言うと、一馬は踵を返して帰ってしまう。だけど追いかける気も起こらなかった。
俺は呆然とそこに立ち尽くす。だけど、幽霊は消えて居なくならない。今すぐにでも駆けだしてしまいたい衝動を抑えながら、三笠に一歩ずつ、近づいた。
記念館はとっくに閉まっていて入れない。ならば、出来る限り近づくしかない。艦橋を見上げられる位置まで辿り着いた。心なしか、とても長い道のりのようだった。
俺は疲れているのだろうか。それとも悪いものに憑かれでもしたのだろうか。
確かめなければならない。自分の眼で幽霊の正体を。
艦橋に、その女性はまだ立っていた。悠然とただ海を眺めていた。
「あのー、すいませーん！」

邪魔をしては悪いと思ったが、俺は艦橋に向かって呼び掛ける。聞こえているだろうか。

そもそも初対面の相手に何をしているのだろう。でも、俺の目には確かに彼女が見えているのだから。

女性は声に気付いたのか、こちらを向いた。改めて見ると、遠くからなのに堂々とした立ち振る舞いが印象的だった。

本物の軍人を目にしたような気分だった。だけど、怯まずに彼女に呼び掛けた。

「記念館、もう閉まっているんですけどー、そこで何をしているんですかぁー」

彼女は手すりに手を置いた。

「此処は、良い場所だなぁ！」

返って来た返答に、俺は拍子抜けしてしまう。まさか本当に唯の観光客だったのだろうか。

「何より見晴らしが良い。ヒコウキ……だったか。あれが空に飛び立つのも良く見える。夕陽に映える空も海も綺麗だ！　そう思うだろう？」

「あ、俺もそう思います！」

艦橋から見渡す景色は最高だ。一番見晴らしが良い。同志が目の前にいるとは何よりだ。少し嬉しくなり、同時に誇らしかった。

「だろう！　この世界も、この蒼い海も、何時までも此処で見守っていたいものだ」
　彼女の雄大な語り口に、俺も何時の間にか夢中になっていた。だけど忘れていた。俺は彼女の正体を確かめに来たのだ。
「ところで、貴女はどうしてここにー？」
「……成程。そういうことか。確かに我ながら不注意だったな」
　彼女ははぐらかすようにそっぽを向いた。だが、再びこちらを向くと彼女は笑みを浮かべる。そして、右手を胸に当てた。
「私とお主が出会ったのも、何かの導きのなのだろうな」
　大胆不敵で恐れを知らない、そして何もかもを包み込んでしまいそうな風格だった。
「私は三笠。この船と同じ名前を持つ者だ。また、何処かで会おう――未来を担う若者よ！」
　刹那、突風が吹きつけた。
　木の葉が飛んできて、俺は思わず腕で顔を覆う。
　目を開けると、もう艦橋には誰も居なかった。目を擦っても、誰も居なかった。
「俺は、夢でも見ていたのか？」
　どんなに見回しても、もうそこには誰も居なかった。
　流石に撮るのは失礼だと思ってシャッターは切っていなかったので、今更彼女が何者

かだった等確かめようがなかった。

「……俺、疲れてるのかな?」

彼女は自分の事を三笠と名乗った。まさか、本当にあの戦艦三笠の付喪神か何かだったのだろうか。有り得ない。狂気の沙汰だ。

きっと、偶然同じ名前だとかそういう意味なのだろう。もし、彼女の言う事が本当ならば、また何処かで会えるのだろうか。

「三笠さん、か……」

俺は口の中で噛み締めるように、その名前を繰り返していた。

夕陽が沈み、もう暗くなっていた。

●五

帰った後、昨日貰ったプラモデルの組み立てを早速始めようとしていた。此処最近、テストで忙しかったので大型艦は作れていなかったが軽空母からリハビリ出来るなら好都合だ。

しかし、それでもなかなか作業に手は付かなかった。

思い出されるのは、あの艦橋での出会いだった。結局、三笠さんとは誰だったのか。俺が見たのは幻や幽霊の類ではないと信じたいのだが、どうにも不思議な人だ。一馬に

は見えていなかったことから考えても、俺がおかしくなっているのかそれとも三笠さんに何かがあるのかどちらかだろう。

考えていても仕方が無い。気分を変えようとテレビを付けた。いきなり映ったニュースの漁船沈没事故の知らせで、俺は夢のような出会いから一気に現実から引き戻された。一馬が英語の授業で言っていた事件だった。

驚くことに、沈んだ漁船は直前に炎上したという。その船体は何かに叩き折られたかのように真っ二つだったという。他の漁船の船員によると、何かが降り注いできたようだったという。しかし、夜間だったので誰もその正体が何なのか分からないのである。唯一つ言えるのは、生存者は居なかったという事だ。

「……冗談じゃない」

俺の口からはそんな言葉が出ていた。

船は命を運ぶ箱だ。険しい蒼い航路を乗せて走り続ける重みは、きっと船のトン数なんてちっぽけに思えてしまうほどだろう。

プラモデルを作り出した頃、まだ幼かった俺は軍艦の史実の事なんか気にしなかった。まして、船の中に何人乗っていようが俺にとってはそれは然程大きな問題ではなかった。

だけど、ある日を境に俺の中で船の意味は変わった。

沈んだ船の重さは、如何ほどか。そんな考えが頭を過るようになった。それほどまでに俺の中では、船に乗せられた命の重みが痛い程分かる出来事だった。

だからか、相次ぐ沈没事故に思う所が無かったわけではない。果たして、これまで何人もの命が失われただろうか。

一馬も知らない俺の心の深層。あの事をいつも思い出してしまうのは俺の心にとっても決してプラスではない。平時は努めて思い出さないようにしていた。

何隻もの一般艦船が立て続けに沈む事は只事ではない。まして、悪意を持って船を沈めようとするような恐ろしい存在など居てはならない。

船が沈むという事の重大さを、事件が連続し続けてる所為で皆忘れているのではないだろうか。

船は簡単に沈んで良いものではない。だが、沈む時は何時もあっけない。

考えても、また暗い気持ちになってくる。気分を紛らわすために俺は撮りためた特撮を見て、そのままベッドに潜った。

どうかせめて、悪い夢だけは見ないようにしたいものだ。

祈るようにして、俺は布団を頭に被った。

●六

女が２人、寝殿の最奥に佇んでいた。

御簾越しに、沢山の女達が頭を垂れていた。巫女姿の者、侍のような出で立ちの者、軍服を身に纏った者、忍び装束を身に纏った者、身分や姿は十人十色であった。

しかし、彼女達のいずれも、御簾越しに佇む自らの上司を恐れていた。

「こっちの指揮官はまだ見つからないわけ？」

妖艶な女の声は、淑やかさの中に苛立ちと激情が少なからず含まれていた。

傳く部下達は、上司である彼女の次の言葉をじっと待つ。この時間が、永遠に続くように重苦しい。

「はぁん、まあ良いわ。いざとなれば、この私が出向いて、このニホン？　を火の海に変えるのもやぶさかではないし」

御簾越しに炎が燃え上がるのが見えた。傳く彼女達は慌てた。

激情家であるこの女は、冗談は決して言わない。そうなれば、自分達の首を切った上で有言実行する事は目に見えていた。

「そ、それはお止め下さい！　まだ、聖域は発見出来ていないのです。もしも、聖域を発見する前に破壊するような事があれば、カミ様から何と咎められるか……」

「囀るな。元はと言えば、お前達の手際が悪い」

今度は冷徹な声が御簾から響いた。青い炎が威圧するように、彼女達の前を迸った。

ひぃ、と悲鳴を漏らす者。顔色を悪くする者が居た。

「古来より、弱き者は淘汰されるが運命だ。我らの随伴に弱き者は要らない。……とはいえ姉さま、彼女達の言う事も一理あります。まだ、私達が出る幕ではないでしょう」
「確かに、此処で派手に暴れるのも決して賢いとは言えないわ。どうやら私達を嗅ぎ回っている虫ケラ共が居るらしいし。まあ、所詮は飛んで火に入る夏の虫。それはそれで返り討ちにするのも一興よねぇ」
「一興、か。確かにそれも面白いですね、姉さま。戦ってみたくはあります」
「そういうことで、命拾いしたわね。だけど、見逃したわけじゃないわ」
烈火が燃え上がる。今度は警告するように。
「私に虫ケラの如く燃やされないように……務めを果たすこと。良いわね？」
その場に部下全員の顔が真っ青になった。

●七

疲れからか夢は見なかった。だが、目が覚めるのも思ったより早かった。目覚ましの代わりになったのは、スマートフォンの着信だった。
「……何だこんな時間に」
不快感に苛まれながら、誰からの通話なのかを見る。一馬からだ。夜中に電話を掛けてくるような奴ではないはずだ。時計を見ると午前四時。夜中ではないが、早朝と呼ぶ

にも憚られるくらい外は暗い。受話器ボタンを押すと、「もしもし、お前か！　そっちは大丈夫なのか！」と切羽詰まった一馬の声が飛んでくる。何か緊急の用事だろうか。だとしても彼の事だから下らない事だろう、という気構えで俺は通話に受け答えする。

「どうしたんだ……今何時か分かってんのか？」

何が大丈夫なのか分からない。俺はまだ寝ぼけ半分で、何も飲み込めなかった。

「……大丈夫そうだな、良かったぜ。でも、沿岸は大変な事になってんだよ！　多分お前の家からも見えるから、窓から外を覗いて見てみやがれ！」

切羽詰まった様子の一馬の声に只事ではないと察する。俺はカーテンを思いっきり開けると、朝焼けが見えた。だが、目を凝らすとオレンジ色に染まっているのは空ではなく、煙を吐いている沿岸の街だった。

スマートフォンを持ったまま俺は彼に問い質した。

「火事か!?」

「大火事だ！　こっちは大変な事になっている！　民家が突然爆発して炎上したみたいで、そこから燃え広がったんだ！」

「お前は大丈夫なのか!?」

「俺は何とか……だけど家は燃えてるし、妹が大火傷して救急車を呼んだんだ」

身体から力が抜けていくのを感じた。大変な事になってしまった。

「死人も出てる、こんなの初めてだ！」
取り乱した一馬の表情が容易に想像できた。
一体、どうしてこんな火事になってしまったのか。風で火が広がったのだろうか。
とにかく声が震えている一馬を落ち着かせる必要がある。
「落ち着け。まずは、お兄ちゃんがしっかり気を持ってないと駄目だ」
「こ、これで落ち着いていられるか！　どうすりゃいいんだよ！」
「妹さんが目が覚めた時、最初に目にした家族が取り乱してたら不安がる」
「だけど……う、うう……そ、そうか。すまん」
「とにかく、お前が生きてて良かった」
「ありがとう。こっちも、お前と話せて良かったよ」
「そっちで何か変わった事があったら言ってくれ」
こちらは離れているので、火が燃え移る事は無いだろうが一馬の家、いや沿岸の街が大火事になっている。俺は火事の状況を確かめる為に、家を飛び出した。右手にはスマートフォン、左手には双眼鏡だ。家は高台にあるので、東京湾から沿岸を一望できる。左手で双眼鏡で眺めた沿岸の町は途絶える事無く煙が立ち上っている。ＳＮＳによれば、燃えているのはあの町だけらしい。
暁の空を炎がオレンジ色に染めていた。こちらは高台だったので、火の手が回らなく

て無事だったのだろう。胸を撫で下ろす一方で、やはり被害が拡大している沿岸が気掛かりだ。

そう思った時だった。

「あっ」

思わず声が出た。まだ暗い海の方から何かが飛んでいく。そして――爆音と共に再び火の手が上がった。

何かが海の方から飛んできたようだ。双眼鏡を東京湾の方へ向けると、暗がりの海に何かが浮かんでいた。確かに漁船や遊覧船が浮かんでいるのは当然だ。

問題はそれらは火を吹いて今にも沈みそうだったことか。一体何が起こっているんだ、ともう少し遠巻きへ顔を向ける。

三笠と同等、いやそれよりも明らかに巨大な艦船が何隻も佇んでいた。双眼鏡を取り落としそうになったのは言うまでもない。

「……軍、艦……!?」

俺には確かにそう見える。しかし、少なくとも漁船等の類ではない。それは、先程の爆音から間を置かずに火を吹く。

間違いない。軍艦の類だ。そう断言できる程にシルエットがはっきりしていた。

右手で持ったスマホに俺は呼び掛けた。

「おい、一馬！　そっちから海は見えるか」
「東京湾は目と鼻の先だが……変わったものは何も見えねえぞ!?」
「船もか？」
「そりゃ船くらいあるだろ！　だけど燃えて今にも沈みそうだ！　何で船まで火事になってんだ!?」
「他にデカい船は見えないのか!?　例えば、軍艦とか！」
「はぁ!?　こんな時まで何言ってんだ、あるわけねえだろ！　寝ぼけてんのか!?」
「いや、その……何でもない」
「ったく、お前の方がしっかりしてくれって話だよ！　あ、でももしかして俺を元気づける為にわざと冗談言ってんのか？　お前冗談下手くそなんだから無理すんなって話だぜ！」
　この状況で、このポジティブ思考は羨ましい。立ち直ってくれて良かった。そのまましぶとく生きてくれ。
　しかし、またしても俺にしか見えていないのだろうか。
　疲れているのか、一馬の言う通り俺は寝ぼけているのか。
　こうなったら自分の目で確かめに行くしかない。だが、街は燃えていて生身で行くのは危険だ。

俺は「とにかく、家族と一緒になるべく海から離れてくれ！　無事でいろよ！」と一言入れて通話を切った。嫌な予感がする。昨日の三笠さんと言い、そしてあの軍艦達と言い、俺の幻ではないというのならば唯の船ではないことは確かだ。自分が正常ではないような気がした。しかしこれは断じて、狂人の幻ではない。まして、夢物語ではない。頬を抓った。じん、と痛みが走った。

家に飛び込む。上着を羽織り、自転車を準備しなければならない。一先ず自室で着替えようと扉を勢いよく開けた。

「……にゃ？」

何か居た。猫耳の生えた少女がだぼだぼの服を着て、俺のプラモデルを勝手にべたべた触っていた。見ると、尻尾まで生えている。コスプレだろうか。

声を荒げる前に、戸惑いが隠せない。鍵を掛けていなかったとはいえ、何時の間に侵入したのだろうか。

「あー、これは失礼したにゃ。鍵が開いていたので、勝手にお邪魔したのにゃ。実はお宅に用があって、時間はもうにゃいと言うか」

「いや何やってんの君」

「話は後にしてほしいかにゃあ」

幼女だ。見た限り、小学生程の背丈しかない割には流暢に喋る。何故ここに侵入して

いるのか。そして、よりによって人の新作を手に持っているのか、小一時間問い詰めたい所だったが、まずは落ち着こう。

「……君、お父さんとお母さんは？　それは俺の作品だから返して欲しいんだけど」

「それなら話が早いにゃ。これを返して欲しいのかにゃ？」

窓を思いっきり開けた彼女は、そこから身を乗り出して脱走した。此処は二階だ。落ちたら大怪我するはずなのに、彼女は軽い身のこなしで着地。そのまま風のように走り出した。

「あっ、コラ！」

「東京湾の軍艦について教えてやろうかにゃ？」

「何だって!?」

「教えて欲しけりゃ、こっちまで着いてくるのにゃ！　もう時間は無いにゃあ」

「畜生！　待ちやがれ！」

時間がない？　ともあれ、プラモデルは返して貰うしかない。しかもあの口ぶりだと俺にしか見えていなかったはずの軍艦の事を知っているようだ。

俺は結局着替えぬまま階段を駆け下り、自転車にまたがって追いかける。此処は一本道、街に出る道は坂しかない。ひょい、ひょい、と猫のような軽い身のこなしとすばしっこさで逃げる猫耳少女。それを自転車で追いかける俺。だが、いつまで経っても追いつ

く気配が無かった。
見ると、バネのように飛び跳ねる妙なメカに跨って移動しているようだ。あんなに動いては、プラモデルの安否が心配である。
「おい待て、綾波を返せェ！」
「ひぃ！　鬼のような顔だにゃあ、おっかないにゃぁ！」
だが相手の動きも超人的だ。坂をショートカットしながら逃げていく。だが、一向に俺の視界から逃れるような逃げ方はしない。まるで、俺を何処かへ誘導しているかのようだった。
坂を駆け下り、気が付けばいつもの学校の通学路へ入っていた。見るとマシンが変形する。車輪が現れて、走り出した。一体どうなっているんだあの乗り物。
ふと空を見ると火の手から俺は遠ざかっているようだ。そして、しばらくして道を抜けると戦艦三笠が俺を出迎えていた。
逃げる少女を追い、気が付くと公園の近くの鬱蒼とした林へ入る。誰かが意図的に植えた人工林らしいと聞いていた。
案の定、少女は見失った。
まるで此処だけ違う世界のようだった。木の茂り方は空が見えない程だ。
「何処行ったんだ、あの猫娘は……」

勢いで追いかけてしまったが、あの少女はどう見ても只者ではない。あの身なりであんな機械を扱いこなすなんて。

知っている事を全部洗いざらい吐いて貰うしかない。そして綾波は返して貰う。

しばらく自転車を押していると、足元にぽっかりと開いている穴が見えた。これ見よがしに蓋が開いている。地下通路だろうか。こんなものが三笠公園の近くにあったのが驚きだ。

如何にも怪しそうだったが、見ると猫の毛らしきものが落ちており、後に続いている。あの幼女は間違いなく此処から先に居るのだろう。自転車をそこに止めて、穴に入っていく。

中はコンクリートのスロープが続く通路になっていた。明かりが付いているので、中に誰かが居るはずだ。しかし、足を少し踏み入れた所で物音が後ろから響いた。見ると、あの蓋が勝手に閉まっていた。

押しても叩いても開く気配は全くない。後戻りは出来ないようだった。

帰りの心配をしつつ、俺は先に進む。恐怖よりも、好奇心と自らの作品を奪還するという目的が勝っていた。

途中には幾つか扉があったものの、それらが開かれた形跡は無い。

そして、何より落ちている猫の毛を頼りにするとおのずと最奥に辿り着くのである。

扉を開けた。俺は思わず目を見張った。
目の前に広がっていたのは、ドックのような場所だった。そう認識できたのは何処かの国が作っていた地下船渠によく似ており、幾つものトンネル状の穴にパイプラインのアーチが架けられていたからである。
だが、そこには艦船の姿は無かった。こういった機材が無ければ、俺でも船渠と認識できなかったかもしれない。
「驚いたかにゃ?」
俺は肩を震わせた。心臓が止まるかと思った。目の前で、あの猫耳少女が得意げに笑っていた。
「ようこそ、この明石の秘匿ドックへ！　歓迎するのにゃ」
だぼだぼの袖を振って、彼女は言った。
明石とは、これまた妙な名前だ。明石と聞いて思いつくのは、兵庫県の明石市。そして、連合艦隊の工作艦の明石だった。
「説明は後だにゃ！」
「ああそうだ！　誤魔化されないぞ、火事場泥棒！　綾波を返してもらうぞ！」
「泥棒は誤解だにゃ！　本当はちゃんとした時間に伺うつもりだったけど、認識艦船共が出てきた所為で緊急の用事になってしまったにゃ」

「じゃあ何で俺の綾波を――」
「それに関しては、こっちに来てほしいにゃ」
　彼女は跳ねるようにして工廠の中へ入った。そこには、大量の機材や何のものか分からない設計図。
　そして、特筆すべきは巨大なカーテン。近くにあるコンピューターのモニターには、「未成」と表記されている。
「これって……」
「見ての通り、建造中の艦船だにゃ」
「待って。俺の知ってる工廠と違う」
「そりゃそうだにゃあ。認識できなければ、普通の人間はこのドックに立ち入る事すら出来ないし、まして今暴れている認識艦船達を視る事すら出来ないのにゃ」
「東京湾に居た軍艦が、それなのか。一体どこのどいつが……」
「認識艦船は、この世界の人間では認識出来ない無人の軍艦だにゃ。普通の兵器は当然効かないし、レーダーにも映らないにゃ」
　卒倒しそうになった。そんな代物が存在したのか。確かに、そんなものがあれば人知れず艦船を沈める事も出来そうだ。一体何処の国がそんなものを開発できるというのだろう。

それに、そんなものは現代兵器でも対抗できない。今の言い方だと、自衛隊、下手したら米軍でさえも対抗できるか分からない。いや、そもそも認識出来ないので存在に気付かない兵器なのだ。

姿こそ第二次世界大戦の艦船のそれだが、巨砲を持ってして見えざる艦隊が船や街を襲撃するのは十二分に脅威である。

「そんなの……どうやって倒せば良いんだよ!?」

「慌てにゃい。奴らに対抗するには二つの要素が必要にゃ」

だぼだぼの袖から、２本のドライバーが飛び出した。指のつもりなのだろうか。

「まず、認識艦船に対抗できるのは、【動力学的人工海上作戦機構・自律行動型伝承接続端子】」

「何て?」

途中までしか聞き取れなかった。緩い喋り口に反して後半はかなり早口だった。

「略して【ＫＡＮ―ＳＥＮ】。つまるところ、明石達のような人の姿をした艦船だけだにゃ」

「……え?」

艦船、なのか?　今目の前に居る猫耳少女が?

悪い冗談ならそれまでだった。だが、恐らくこの様子では本当なのだろう。彼女は、

俺の知りたかった事。他人では知り得なかった解答を知っていた。姿こそ子供だが、只者ではないのは確かだ。

「人の姿をした艦船、か。百歩譲って今は信じておく。と言う事はお前はやっぱり戦えないのか？」

「察しが良くて助かるにゃあ。明石は工作艦だからにゃあ」

「……じゃあ猶更どうすれば良いんだ!?」

俺は彼女を揺さぶる。頭の中は取り乱していた。この間にも、街は大変な事になっているはずだ。

「お、落ち着くにゃぁ！　そもそもＫＡＮ―ＳＥＮだけじゃ戦う事は出来ないにゃ！

ここで、さっき言った二つ目の出番にゃ」

「二つ目!?」

「……明石達の、指揮官になってくれないかにゃ！」

彼女は真剣そうな眼差しで訴えた。

つまり、俺に艦船とやらの前線指揮を執って欲しいということだろうか。そんなの無理だ。知らない人よりはあるかもしれないが、それでも素人同然の俺の知識で艦船の指揮など出来る訳が無い。

「指揮官、って……俺に、何が出来るって言うんだ……!?」

「当然にゃ！　それは――」
　明石が言いかけたその時。再びスマートフォンの着信が鳴り響いた。
「か、一馬からだ」
「カズマ？」
「友達だよ」
　言った俺はすぐさま電話に出る。また何かあったのだろうか。
「おいどうした、一馬」
「お前か！　大変だ、今度は別の街が燃え出した！　本当にどうなってんだよ!?　消防車は来てるのに被害は拡大する一方だぞ!?　横須賀はお終いだ！　日本もお終いだぁーっ！」
「俺に言われても――」
　言いかけた俺ははっとした。
　そうだ。この状況をどうにか出来るのは、俺しか居ない。
　スマートフォンを握り締める。
「……一馬、待っててくれ」
「え？」
「俺も、横須賀が、海が、船が大好きなんだ。それをこのまま放ってはおけねえよな」

「だ、だけどお前に何が出来るってんだよ!?」
「後は任せろ。やるだけやってみる」
「やるって何をだ!?　おい！　おーい!?」
通話を切り、俺は明石の方に向き直った。迷っている場合ではない。
この間にも被害は広がる一方だ。それなら、もう此処で食い止めるしかない。
「……明石。俺を指揮官にしてくれ」
「い、いきなりどうしたにゃ!?」
「もう迷ってられないんだよ！　俺はどうすれば良い!?」
そう言った途端、足元が大きく揺れた。俺はバランスを崩して尻餅を搗く。
明石はと言うと、よろけた拍子に転がっていた何かの缶を踏んで床に転倒したようだった。
尻を摩りながら起きる。何で揺れたのだろう。もしや、着弾がこの近くまで迫っているのだろうか。
「おい、明石。大丈夫か?」
「ふにゃぁ……爆撃機がチカチカして見えるにゃ……彗星かにゃ?」
「落ち着け此処は地下だぞ!?」
駄目だ、完全に頭を打ってダウンしている。取り合えず彼女をそこらへんに寝かせて

おく。

これではしばらく復活するまで時間が掛かるだろう。彼女が踏んづけたと思しき缶を見る。モンヌターエナジーだった。

不摂生な生活をしているのだろうな、と半ば同情しつつ俺は床に放り出された綾波を手に取った。先程取り落とした所為か若干壊れてはいるが、明石はこれを何かに使おうとしたのだろう。

……まさか、プラモデルの船を素材にしようとしていたんじゃあるまいか。流石にそんな馬鹿な話はないだろう。しかし、先ほどの垂れ幕とコンピューターの前に行くと明らかに何かを入れてスキャンしてくれと言わんばかりにガラスのケースが置いてあった。

「推奨サイズ：七百分の一」と書かれたシールが貼られている。七百分の一と言えばよくカゲロウで売ってあるプラモデルと同じくらいの、実艦とのサイズ比だ。手に持っている綾波も丁度七百分の一サイズである。

垂れ幕を捲ってみようかと思ったが、不思議とそれは憚られた。幕の奥に何かが居るのは間違いないのだが。しかし気になるので捲ろうとしたその時、もう1度足元が揺れた。

もう時間は無い。やるしかない。

綾波を機械にセットした。そして蓋を閉める。コンピューターの画面が変わる。
「建造を再開しますか？　【キャンセル】【確定】」とモニターに出て来る。
「懲り懲りなんだよ……これ以上、船や海で悲しい思いをする人を出すのは」
脳裏に過る。あの時の記憶が。海に呑まれていく巨船の映像。人々が水面に吸い込まれていく様が。
「この海で……好き勝手させてたまるかよ！」
今更後戻りは出来ない。【確定】のボタンを押した。
次の瞬間、垂れ幕が激しく光り輝く。
「メンタルキューブ、艦船の外観データを取得。読み込み二十％……三十％……五十％……九十％……九十九％……百％、艤装の外装を高速生成します」
とてつもない熱を帯び、まるで生命の誕生を思わせるような力強い光だった。
コンピューターの音声は淡々としているが、垂れ幕の奥は何かが溶けたり沸騰したり、かと思えば金属音がしたりと物騒だ。
その行く末を、俺は唯見守ることしか出来なかった。
そして間もなく、垂れ幕が吹き飛ぶ程の爆風が俺に襲い掛かった。
「建造を完了しました」
机に叩きつけられた俺は、半ばぼんやりしながらその声を聞いた。

目を擦ると、煙が周囲に立ち込めていた。
何があったのか、思い返す余裕などない。
頭を上げた。そうだ。綾波はどうなったのだろうか。立ち込めた煙が止む。
俺は思わず息を呑んだ。
眼前には少女の姿があった。丈の短いセーラー服。そして、目を奪われたのはクリーム色の髪にルビーのような赤い瞳。
「君は――」
少女は、今まで見た誰よりも可憐で、そして力強かった。
「綾波(あやなみ)……です。鬼神、とよく言われるのです。よろしくです」
目を疑った。あの艦船プラモデルから、本当に少女が出来てしまったというのか。
華奢な容姿とは裏腹に、とても凄まじい圧を感じる。
三笠公園での出会いを思い出した。それによく似たものだった。
「貴方は、綾波の指揮官なのですか?」
俺はゆっくりと頷いて肯定した。
正直、頭は付いていけてない。だが、此処から先は思い切りで乗り切らなければならないだろう。
「ああ。俺が、君の指揮官だよ。……戦えるか?」

「はいです」
綾波は即答した。
これが、明石の言っていたＫＡＮ―ＳＥＮ。少女の姿をした彼女に戦う事を命じるのに抵抗が無いわけではなかった。
しかし。彼女の瞳を見ると、何故か安心した。彼女ならば、この絶望的な状況をひっくり返してくれるのではないだろうか、と。
再び足元が揺れた。轟音がこちらに迫ってきている。もう時間が無い！
その時だった。スマートフォンのバイブ音が鳴る。見ると、机の上に置かれていたようだ。おかしい、さっきまで俺のポケットにあったはずだが。
そして、勝手に画面が光った。何かのアプリを起動したようだ。
「艦隊指揮プログラム・アズールレーンをインストールしました。指揮官と所属ＫＡＮ―ＳＥＮを認識」
「アズールレーン!?　そんなもんインストールした覚えは無いぞ!?」
「明石が勝手にやっておいたにゃぁ」
俺は机の向こう側で背伸びする猫耳少女に目をやった。
「明石!?」
「……明石？」

綾波も彼女を認識したのか、何処か懐かしそうな、そして意外そうな表情をしていた。
「綾波ぃ、久しぶりだにゃあ」
「……まだ、はっきりとはしないのです」
「まあ追々色々教えてやるにゃあ」
「明石。それよか、さっきの勝手にインストールしたのって……」
「倒れてるだけで終わるのは、明石らしくないにゃぁ。指揮官。これから明石はドックの操作をするにゃ。指揮官は、そのアプリを通して綾波を指揮するのにゃ！」
言うと、明石は綾波の手を引っ張る。「こっち来るにゃ！」と言って走る明石に言われるがままだった。

●八

艤装が展開され、少女の身体に纏わりつくようにして装着される。
右手に握るのは艦首を模したブレード。左手に握るのは砲塔。
「綾波。建造早々で悪いけど、湾内に大量の認識艦船が居るにゃ！　敵性信号を発している奴を片っ端からやっちゃうにゃ！」
明石のアナウンスが聞こえて来る。綾波は小さく頷く。
最後に、両足に魚雷発射管が取り付けられた。
ドックに立つ少女は、生まれながらにして戦う運命を背負うが故か、その瞳に戸惑い

も何もない。
遂に秘匿船渠の入り口は開かれた。
小さく彼女は頷く。
「……また一人、ですか」
綾波はごちった。少女の枷に成り得るのは、孤軍故の寂しさだけだった。
●九
アプリ・アズールレーンがスマートフォンに映し出したのは湾内の映像。
何処から撮影されたものかは分からない。これもまた謎技術というやつだろう。
しかし、危険度は「脅威海域」と示されている通り、沿岸は大惨状。陸上へ砲撃を続ける駆逐艦の姿がくっきりと映っている。
マーカーには「量産型フブキ型」と艦種を示す名前が書かれていた。
認識艦船とやらは、帝国海軍の軍艦を模しているということだろう。特型駆逐艦は、戦中に殆どが沈められている。当時のものが現存しているとは考えにくい。
わざわざ帝国海軍の艦のコピーで日本を攻撃するなんて悪趣味な敵だ。明石曰く無人らしいのは本当のようで、成程搭乗員の姿は何処にも見られなかった。
船を沈めるのは心が痛むが、話し合いが出来ない相手ならば遠慮なく沈めるしかない。

しかし問題はチュートリアルも無しにぽんと手渡されたこのアプリだった。
魚雷のアイコンや、よく分からない数字が表記されている。これが何なのか分からない。
そう思った矢先、何処からか綾波が飛び出してきた。どうやって水の上で戦うんだ、と疑問にも思わなかったがすぐさま解消される。
まるでスケートのように、水面の上を滑っていた。
しかし、彼女の向かう先には3隻の艦船。駆逐艦「量産型フブキ型」の居る方に突っ込んでいる。
向こうは敵対者を認識したのか、早速動き始める。砲が彼女を目掛けて飛んだ。華奢な少女ならば、百二十ミリ連装砲を受ければ容易く消し飛んでしまう事は想像に難くない。
突っ込んだ彼女を爆炎が飲み込む。
「綾波っ！」
思わず叫んだ。
しかし、煙の中からは微動だにしていない綾波の姿があった。損傷軽微。艤装に煤が付いた程度だ。嘘だろ。
「ぶ、無事か……」

「指揮官……？」
　何処か呆けた彼女の声が聞こえて来る。アプリを通して彼女が何を言っているのかが分かる。
「聞こえてるのか、綾波!?」
「は、はいです」
「大丈夫、なのか!?」
「平気、です。でも、味方の声が聞こえると安心するのです」
　俺は彼女を危険な現場に送り出すのが不安になった。
　しかし。
「でも、もう大丈夫です。綾波は……ただの駆逐艦です。でも、どんな相手でも戦えるです」
　だが、彼女は俺が思っている以上に一隻の艦船としての使命を全うしようとしていた。純粋すぎて、怖くなってしまうほどだ。
　水面を蹴った綾波は、フブキ型三隻を視認すると左手に握った主砲で一番手前の一隻を狙い撃つ。彼女の主砲は、量産艦に比べると人型台に小さい。
　認識艦船は飛んできた豆鉄砲をバリアのようなもので防ごうとした。が、すぐさまそれに罅が入って砕け散った。

爆炎が量産艦を包み込む。
「次っ」
彼女は続け様に弾幕を放ち、二隻のフブキ型目掛けて弾を放つ。
「……終わったのです」
綾波が三隻居た量産艦を抜き去ると共に、轟音が轟いた。
「撃沈……！　凄い、あれだけのサイズ差があるのに倒せるのか！」
俺は感嘆した。人間台の少女が巨大な艦船を斃してしまう。その姿に感動すら覚えていた。
だが、綾波は安堵の表情を見せなかった。というのも、彼女の眼前には湾を塞ぐ重巡洋艦の姿が。
「フルタカ型……古鷹型か！」
「流石に主砲では落とせそうにないです」
射程が足りていない。その上、重巡洋艦は駆逐艦のそれより二回り大きい二百三ミリ砲と副砲を持つ。
「指揮官……魚雷発射の許可をお願いするです」
「魚雷発射魚雷発射……！　あ、これかっ！」
画面にある魚雷のマーカーを押すと、彼女の魚雷発射管に魚雷が装填される。

どうやら、今の今まで装填していたらしい。時間が掛かるのは史実通りだ。
ということは、主砲と違って気軽に撃てるものではない。尚且つ、確実に当てにいかなければならないだろう。
「綾波、魚雷の有効射程まで近づけるか？」
「いけるはず、です……！」
古鷹型の全長は百八十メートル程だ。それに向かって二メートルも無い体躯の少女が突っ込むのである。危険だ。
しかも、魚雷の有効射程も史実のそれより短いはずだ。
だが、懸念に反して綾波は着実に副砲を避けていく。心なしか先程よりも動きが機敏だ。そして、主砲から弾幕を放ち、牽制していく。
「相手の主砲が旋回した！　機関全開だ！」
言うが早いか、フルタカを模した重巡の二百三ミリ砲が火を吹いた。しかし、着弾地点に綾波の姿は無い。
気が付けば、艦の横っ腹に彼女は潜り込んでいた。……速い！　これが、人型の艦船の戦い方か。
放物線を描く砲弾が着弾する前に、機関をフル稼働した綾波が突貫したのである。
「綾波……魚雷全弾発射だ!!」

静かに頷いた彼女の魚雷発射管から扇状に魚雷が放たれた。
間もなく、魚雷がフルタカ型のバリアを穿ち、船体に穴をあける。
全弾命中。史実のそれより遥かに小さいその魚雷は、認識艦船に対して史実と同様の威力を発揮するようだった。
重巡・フルタカは間もなく航行出来なくなった。轟と炎を吹き、真っ二つになって東京湾に沈んだ。
「っ……やった、のか？」
「そう、みたいですね」
俺は大きく溜息を吐いた。
終わった。東京湾を砲撃していた敵艦船はこれで全て撃沈したことになる。
こんな華奢な少女の何処に、此処までの力があるのだろうか。
「……凄いな」
身体から力が抜けてしまう。
綾波も初めての戦闘が無事に終わったからか、少し安堵した様子だった。
「いえ、指揮官が居なければ綾波は――」
そう彼女が言いかけた時だった。
彼女の身体が燃えた。

「えっ……」
爆炎が画面を包み込んだ。
何が起こったんだ。
「――綾波ィ!!」
見ると、画面には大量のＥＭＥＲＧＥＮＣＹ　ＳＴＡＴＵＳの文字が赤く浮かび上がっている。
直訳すると、緊急事態発令だが、俺は綾波に何があったのか知りたかった。
だが、すぐさま画面に一隻の敵が映し出される。
それを見て俺は絶句した。
「人型の艦船……!」
明らかに普通ではなかった。女が水面に立っている。
白いウサギのような耳を生やした大人の女性であった。
服装は侍のようで、日本刀を構えている。極めつけは、四基の主砲を携えた艤装であった。
「索敵を怠り、油断をするとは……愚かだな。まあ駆逐艦一隻でよくやったものだ」
「……!」
通信に介入されているのか？

別の女の声が聞こえて来る。
「そちらの指揮官へ告ぐ。私は重桜艦隊所属、利根型重巡洋艦一番艦の利根だ」
●十
利根型と言えば、帝国海軍の航空巡洋艦だ。
重巡クラスと駆逐艦では、真っ向からの戦力の差は明らか。特に、綾波は今不意を突かれて倒れている。
こちらは人質を取られているも同然だった。固唾を飲み、相手の次の言葉を待った。
「ただちに投降せよ。横須賀を【重桜(じゅうおう)】に引き渡すのだ。さもなくば、この綾波を此処で沈める」
利根の要求は街丸ごとだ。一体何を考えているというのだろう。そんなもの、渡そうと思っても渡せるわけがない。
「ふざけるな、そんな事出来る訳がないだろう!? しかも、利根ってことは……お前は日本の艦船だろ!? 何でこんなことをするんだ!」
「ニホン……違うな。我々は、【重桜(じゅうおう)】のＫＡＮ―ＳＥＮだ。そこの綾波も、生まれは違えど同じ陣営の同胞よ」
「どういう事だ?」
「我々はお前達の知るニホンとは似て非なる場所から来たということだ。ただ、横須賀

は我ら【重桜】にもある由緒正しい軍港だからな。我らのモノで何の問題がある？　制圧し、蹂躙し、侵略してでも奪い取る。それだけの事だ」

こいつだ。あの認識艦船を率いていたのは、この利根だったのだ。

利根は刀を水面に伏した綾波に突き立てる。

「選べ。死か、従属か。綾波、お前は【重桜】の艦船だろう？」

連合国にスレイブオアダイを突き付けられた枢軸国のような気分だ。

ただ、相手の言っている事はそれ以上に無茶苦茶である。街を丸ごと一つ引き渡せ？

先に攻め込んできたのはお前達の癖に？

建物が焼けて、船が沈められて、人が沢山死んでいるんだぞ。

だけど、此処で簡単に綾波を見捨てる事も出来ない。綾波は俺に従って戦ってくれただけなんだ。なのに、俺が見捨てる事は出来ない。

「そうだ。綾波さえ見捨てれば、横須賀は助けてやる。どうだ？　綾波。指揮官も死なずに済むんだ。貴様もそれが良いだろう？」

「こいつ……！」

どん詰まりだ。どうすれば良いんだ。唇を噛み締めた。

綾波を見捨てて、横須賀を助ける？

横須賀を見捨てて、綾波と一緒にあいつらの仲間になる？

どっちも冗談じゃない。しかも要求を呑んだところで、あいつがその通りにする根拠もない。あいつは艦隊所属と名乗った以上、まだ仲間が居るはずだ。そうなれば、まだこいつと同等、あるいはそれ以上の敵が押し寄せてくる可能性があるのだ。

絶体絶命。そんな言葉が脳裏に浮かんだ時だった。

「むッ……!?」

利根が日本刀を引っ込めた。どうしたのだろう、と思った矢先、こちらからも何かを察知した。

アプリに表記されているのは、艦載機の群れだった。

「な、何だっ!? 艦載機!?」

「重桜の援軍……いや、違う! これは――!」

俺はそれを確認する。利根にとっても、綾波にとっても、当然俺にとっても予期していなかった事態だった。

飛来したのはＳＢＤドーントレス。第二次世界大戦のアメリカ合衆国の爆撃機が数機、飛んでくる。

だが、艦載機のサイズは通常のそれよりも明らかに小さい。玩具と見紛える程の小ささだ。

しかし、玩具は編隊を組んでこの火事の最中を海で飛んだりはしない。まして、ア

ズールレーンというアプリが玩具の艦載機を認識するはずもないのだ。
そして、この場にアメリカに関係する艦は居ない。湾内には空母も居ない。一体誰が放ったというのだろうか。
「忌々しい……【ユニオン】の艦載機か！　こっちに来るんじゃない！」
それから逃げるように対空砲火を放つ利根。だが、急降下してきた艦載機の爆撃を食らってしまい、爆炎に包まれる。
何であれ助けられた。どこの誰だか知らないが感謝しなければならない。
これは、チャンスだぞ。撤退して態勢を整えるチャンスだ。
「綾波、撤退出来るか⁉」
「……指揮官、それは出来ないです」
「何だって⁉」
「此処で利根さんを逃したら、きっと仲間を呼んでくるはずです。それを防ぐには、今此処で沈めるしかないです」
「沈める――」
さっきは無人の艦船だった。だけど、今度は人型の艦船だ。喋りもするし、意思もある。
沈める、即ち殺す事に俺の中ではストッパーを掛けつつあった。

だが、彼女を放置しておけば、また砲撃で関係の無い人や艦船が燃やされていく。それは俺も嫌だった。ならばもう、戦うしかないのだろう。

「分かった。決心したよ。あいつを此処で倒す。綾波、出来るか？」

「指揮官。綾波は……言ったはずです。相手が誰でも、綾波は戦えるです」

「お前――」

気丈に言ってのける。しかし、そこに強がりのようなものも感じていた。彼女もまた、同郷の艦を手に掛ける事に後ろめたさを感じたのだろうか。

だが、迷いを振り切って立ち上がる綾波の思いは無碍には出来ない。

爆撃機の対応に追われる利根を急襲出来るのは今しかない。

俺に出来るのは、そんな彼女を後押しすることだけだ。

「行け、綾波！　再突入だ！」

「了解、ですっ」

小さく頷いた綾波は再び突貫した。

爆撃を食らいながらも、爆撃機を追い払った利根は、突っ込んできた綾波に対応するのに一瞬だけ遅れた。

「おのれ、まだ戦えたのか。唯の特型駆逐艦如きが！」

主砲から火が噴き、水柱が上がった。

今度こそ仕留めた、と笑みを浮かべる利根。しかし――水柱からは綾波が突っ込んできた。
「まだ抗うのか！」
利根が何かを投げつけた。砲丸はしばらく空中で回転していたが、炸裂して大量の光る弾を撒き散らす。
クラスター爆弾か、それとも三式弾の類か。火花が大量に落ちていく辺り、後者なのだろう。
しかし、その雨さえも綾波は抜ける。
「くそっ！　どうやったら止まるんだよ、お前はァ!!」
「近距離戦は不利だ！　雷撃の後に離脱しろ！」
「魚雷装填完了です」
「よし、魚雷全弾撃て!!」
利根に接近した綾波が、魚雷を扇状に流した。離脱する綾波。
間もなく水飛沫が上がった。少し起爆が速いような気もしたが、魚雷とは艦船が大型だろうが小型だろうが関係なく致命傷を与える必殺兵器。幾ら重巡と言えど、当たれば唯では済まないだろう。
そう思っていたのだが――

「あ、あははっ！　所詮はまだ練度が足りない若輩か！」

――利根は未だに健在だった。

「そんなっ。綾波の魚雷が効いてないのですか」

いや、違う。さっきの光景を思い出す。魚雷の爆発が速かった意味を考える。

一つは魚雷そのものの不発。だが、一発ならともかく全てが不発する謂れは無い。最も、数発は避けられたのかもしれない。

だが、そうではない可能性を考えるとすれば、もう1つの推測が浮上した。

「……違う、誘爆させられたんだ！」

「誘爆……!?」

「流石に重巡でも魚雷が当たって無事でいられるとは考えにくい。あいつの主砲は、建物を燃やしていた事から榴弾が中心だし、小型艦の綾波にも徹甲弾じゃなくて榴弾を使っていた。榴弾なら、魚雷を起爆させられる」

「じゃあどうすれば……」

「分かってる、どっちみち魚雷で仕留めるしか方法は無いんだ……主砲は通用しないんだろ？」

ともかく主砲で仕留められないなら魚雷で仕留めるしかない。だが、相手もそれは分かっている。確実に対策を講じて来るのは目に見えていた。

利根が日本刀を掲げる。
一体何をするつもりなのだろう。あいつの速度は綾波程速くはない。肉薄出来るとは思えない。
「さっきからちょこまかと逃げ回って歯痒く思っていた所だ。飛行機とでも遊んでいろ！」
利根の刀の柄はよく見ると甲板になっている。
そこから小さな飛行機が飛び出し、刀の背をカタパルト代わりにして射出される。
飛び出したのは――水上爆撃機だった。
「瑞雲！　その駆逐艦にしっかり張り付いておけよ！」
羽根の付いたカヌーのような容貌の艦載機は、綾波の周囲を飛び回る。
水上に着地出来るフロートを携えた瑞雲は、彼女が持つ数少ない航空戦力であると同時に航空巡洋艦と言う彼女のアイデンティティを確立していた。
「帝国海軍の迷機をこんなところで見る事になるとは。綾波、振り払えるか？」
「指揮官、撃ち落とせないです……！」
瑞雲は観測機としての役割と爆撃機としての役割を両立する。ちょっかいを掛けるようにして綾波の周囲を飛び回っていた。
彼女もなけなしの対空機銃で応戦するが、元々雷撃戦に特化しているからか、対空戦

闘に慣れていないのか、四苦八苦している始末だ。
駄目だ。対空戦闘に関しては俺も知識が薄い。彼女にどう指揮すれば良いのか分からない。
「弾着観測修正――落ちろォ！」
狙いを付ける利根。
まずい。主砲が来る。
「避けてくれ、綾波!!」
綾波が利根の主砲を躱そうとする。しかし、逃げ場を潰すかのようにして、瑞雲が爆弾を投下した。
爆発に巻き込まれ、綾波は態勢を崩した。
「沈めェ！」
四基の主砲が一挙に火を吹いた。
水上機によって狙い澄まされた一斉射。綾波に逃げ場は無かった。しかし。
「っ……！」
利根の表情に勝利の微笑は浮かばなかった。
水柱が上がった手前から、水面に這うようにして態勢を倒した綾波が直進してくるのだ。

「くそっ！　これでも当たらないのか！」
想像以上だ。綾波は戦闘を重ねる毎に、戦闘のセンスを上げている。
さっきよりも今、今よりも一秒先、綾波は常に成長を続けているようにさえ見える。
今の攻撃を避ける事が出来たのならば、まだ勝機がある。
「綾波、主砲で牽制してくれ！」
「……指揮官、でも主砲は――」
「弾幕を盾にするんだ！　重巡の主砲はクールタイムが長い！　瑞雲はこの際無視して、じぐざぐに航行しながら主砲を連射するんだ！　撃たないよりはマシだろ！」
綾波も決心がついたのか頷いた。要は、今度こそ狙われなければ良い。相変わらず空中には瑞雲が飛んでいるが、先ほどのドーントレスに比べれば瑞雲の爆装は勿論、空母に比べれば利根の搭載数も大した事は無いのである。
「分かったです。やってみるです」
言った綾波は水面を蹴って主砲で弾幕を張った。
幾ら装甲で受けきれると言っても、利根は飛んでくるそれを手放しで受け止める事は出来ない。
それどころか、狙いを付けられないので副砲で接近してくる綾波を迎え撃つしかないのである。

だが、魚雷で攻撃するだけではさっきみたいに誘爆させられる。どうにかして、最適距離を探さなければならない。

しかし下手に接近すれば主砲の斉射を食らう。かと言って遠くからでは誘爆させられるのがオチだ。

「ん？」

その時、俺は画面の数字が急上昇していることに気付いた。

これはどうやら綾波のパラメーターらしいが、そのうちの数字の一部が急激に上昇している。

どうやら、主砲を撃つ毎に彼女の艤装の一部が活性化しているようだった。綾波にはまだ何か力が隠されているようだった。

その部分をタップすると詳細が現れた。それを読んで、俺は笑みを浮かべた。

「これは賭けてみる価値があるかもしれないな」

その部位を見て俺は祈るように手を合わせる。一か八か。彼女の底力に賭けるしかない。

「また魚雷か。重桜の魚雷の恐ろしさは私が一番理解しているつもりだ。またさっきみたいに誘爆してやる」

「……利根さん……！」

「幾らなんでも接近してきたら、もう外さない。四基の主砲のうち一基がお前を沈めるだけだ。所詮、お前は唯の特型駆逐艦だ！」
「綾波、お前の力を信じろ!!」
「！」
　綾波の肩が震えた。
「お前は唯の駆逐艦じゃない！　俺は知ってるぞ！　鬼神って呼ばれるくらい、果敢に戦った艦船なんだろ！」
「……そんなの、よく分かんないです。どんなに鬼神って呼ばれても、綾波は普通に戦ってた、普通の駆逐艦です」
「普通じゃねえよ！　初めての戦いで此処まで凄く頑張ってるじゃないか！　俺が同じ立場なら、きっと震えて足も立たない！　でも、お前にはそれが出来る！　俺はお前の事を素直に凄いって思ったんだ！」
「指揮官……！」
「俺は信じてる！　それにお前が言ったんじゃないか！　どんな相手とでも戦えるって！」
「……！」
「勝つんだ、綾波！　お前は、俺が作った艦船なんだ！」

綾波は水面を蹴った。
利根の主砲が何発も飛んでいく。
しかし、今度も彼女は華麗にそれを避けてみせる。
「そんなに言われたら、綾波も引き下がれないです……やってみるです」
「はっ、覚悟を決めたのか。突っ込んで来るとはな！　飛んで火に入る夏の虫よ！」
「……ソロモンに、行きたい？」
小さく、綾波が呟く。
次の瞬間、綾波の艤装――魚雷発射管に赤黒い稲光が迸った。
先程から高まっていた彼女のパフォーマンスの上昇が、遂に頂点に達したようだった。
仕掛けるなら、主砲のクールタイムの今しか無い。
利根は初めて恐怖を覚えたようだった。
突っ込んできた彼女によって振り上げられたのは、あの巨大な艦首を模したブレードだった。
すかさず自らも、あのカタパルトの機能を備える日本刀を掲げてそれを受け止める。
互いに鎬を削り合う。
「接近戦（ラムアタック）が切札とは、馬鹿げてるな！　主砲斉射でお前の身体を粉微塵に――！」

「――こっちはずっと準備してたのです。そっちは、出来ているのですか？」
「……何だと？」
利根は主砲を全て綾波に向けてから気付いた。
彼女を吹き飛ばすのに足りなかったのは、時間だ。一気に距離を詰められた所為で、主砲の旋回、そして装填も間に合わなかった。
利根の足元に稲光を纏った魚雷が一瞬見える。艦首を模したブレードによる突撃は囮。本命は最初から最後までこれだったのだ。
主砲を撃つ度に、艤装の魚雷発射管が活性化していく。彼女にはどうもそんな力が隠されていた。よって、切札は結局魚雷しかなかったのだ。
「……綾波イィィ！」
戦艦と言えど、それを受けて唯で済んだ艦船は居ない。重巡洋艦ならば猶更である。
さあ、身をもって知れ、小さな鬼神による大物狩りの一撃を。
水底から這い上がれるものならば、這い上がるが良い。
「――鬼神の力、味わうがいい」
零距離から放たれた魚雷が全て、利根へ突き刺さる。足を砕かれた艦船は二度と陽の光は拝むことはない。
引き裂かれるように、彼女の身体から炎が噴き出した。

必殺の一撃をまともに受け止めた彼女の身体は爆発を起こし、大きく傾いた。
「……利根、さん」
大破炎上する、記憶の中の同胞を綾波は見やった。
同情することも無く、憐れむ事も無い。ただ、敵対したことだけが残念だったようだ。
「あ、あ、ぎ……さん、が……さん、先に……逝きます……あ、ああ、でも、私の代わりは、幾らでも……居るのかあ」
虚空を睨む利根にはもう何も見えていないようだった。綾波の姿は結局見えていないようだった。唯々、彼女は愚直に任務を遂行しようとしただけなのだ。
「強い奴が弱い奴に食われる……今ならあの方の言葉がよく分かるよ……でも、戦争は、戦争はやはりこうでなければなぁ……は、はは……」
彼女は最後まで笑っていた。
再三の爆音と共に重桜の重巡洋艦は海へ飲み込まれていく。
綾波は手を伸ばそうとした。しかし――もう、二度と届きはしなかった。
「……綾波」
俺は呼び掛ける。彼女は静かに頷いた。
「……悪い、俺は――」その後に続く言葉は思いつかなかった。何を言っても慰めにも何もならない気がした。

これで、東京湾に巣食っていた艦船は全て撃沈せしめた。だが、全てが終わった後は何処か悲しい静寂が海を包んでいた。

「指揮官は、何も言わなくて良いです。綾波は、普通に戦っただけです。よく分かんないですけど……普通に戦って、こうやって沈む。それが綾波達にとっては当たり前で――」

彼女の表情は俯きがちで見えなかった。

「――それが、綾波達……艦船の運命なのです」

居た堪れなかった。

人の姿をしていても、実際は兵器に過ぎない。代わりが居る、と利根は言った。量産しようと思えば彼女達は量産できるのだろう。そんな運命を憐れむことも同情することも、きっと許されないのだろう。

俺は、そんな子を戦わせていたのか。ずっと、目の前の事に夢中で綾波の事は見えていなかった。

しかし、沈痛な面持ちの俺に彼女は「でも、指揮官」と続けた。

「今回の戦い……きっと指揮官が居ないと、綾波はこうして立っていなかったのです。ありがとう、です」

「……！」

それでも、彼女は沈まずに今此処で立っている。
そして、街の破壊も食い止める事が出来た。戦いは終わったのだ。
謝罪で返すのは、違うだろう。俺も綾波に精一杯の気持ちを伝えた。
「こっちこそ、ありがとう。綾波が居てくれて良かった」

●十一

明石が「後処理は明石に任せるにゃぁ～、まずはお疲れ様だにゃあ」と労ってくれた。しかし、結局アズールレーンがどういうアプリなのかは分かっていないし、何故同じ日本の艦船が敵なのかも分からず仕舞いだ。ただ一つ言えるのは、彼女達は同胞の良しみだからと言って手加減することなく綾波を沈めに掛かって来たし、日本艦と同じ名前を冠しながら出身は日本ではないという不思議な存在だ。重桜。日本と似て非なる国らしいが、一体何処にあるのだろう。

そして、綾波の損傷も思ったより激しかった。不意に食らった利根の砲撃が一番効いたらしい。しかし、ドックで艤装を修復すれば怪我も一緒に元に戻ると言う。明石曰く、今回は良かったが今後は今回のように勝てるかは分からないとのことだ。利根には仲間が居ると仮定すれば、第二第三の襲撃があってもおかしくはないのである。だが、一先ずは勝てた。それだけで今は十分だ。

俺はと言うと、もう疲労がピークに達していたのもあってか、今日は火事に便乗して

学校を休んでしまう事にした。ドックを出る頃には色々あって昼になっていた。あの後、どうやって帰ったのかよく覚えていない。多分、ふらふらしながら自転車でも押していたのだと思う。そして家で帰ったのは良いが、疲れで何をするにも気力が湧かず、夜になるとすぐに風呂に入って、そのまま流れるように寝てしまったのである。

「……今何時だ」

ベッドに伏せると、すぐに意識が落ちてしまったので何時に寝たのかは覚えていない。もう次の朝になっていた。

そろそろ学校に行く準備をしなければならない。放課後には、あの隠しドックに寄って、今度こそ色々聞きだす必要があるだろう。不安、そして僅かな期待。

危ない事に足を突っ込んでいる自覚はあるが、放っておくわけにもいかない。そう何度もあんな火事を起こされて堪るかって話だ。

何より、俺は海と船が好きなのである。もし、俺にしか出来ない事があるのならば引き受けるつもりだ。船で悲しい思いをする人を出したくない。それは、紛れも無い俺の本心だった。

ネクタイを結び、ブレザーを羽織る。着替えも朝御飯も完了。玄関の扉を開けた。学校に行くよりも、早くあのドックに行きたいという気持ちがどうしても逸った。使命感もあったし、勿論好奇心が無かったわけではないのだが。

「……」

しかし、俺はその場で立ち止まる事になる。玄関の前には少女の姿があった。

一瞬、誰かと思ったが、ポニーテールに結ったクリーム色の髪。ルビーのような赤い瞳。

思わず俺は名前を呼んでしまった。

「綾波？」

「はいです」

「何で此処に居るの!?」

「実は、明石の提案で指揮官の家にお世話になることになったのです」

「今何て？」

ちょっと待て。幾ら両親が不在とは言え、いや猶更男の家にこんな女の子が住むのはまずいだろう。

あの工作艦は何を考えているのだろうか。ひょっとして、艦船とプラモデル以外興味の無い男とでも思われたのだろうか。

……いかん。強ち間違ってはいないので否定出来ない。

「なあ、綾波はどうなんだ？　そもそも男と二人っきりで住むなんて、嫌だろ？」

「でも綾波は住む場所がないのです」

「ぐっ……」

と言うことは、あのドックにはまともな居住スペースが無いということだろう。

女の子をあんなところに無理矢理住まわせるのも可哀想だ。あの猫以外は。

幸い、寝室は別々にある。空き部屋を貸せば良い。

「明石曰く、艦船と指揮官は一心同体、寝食を共にすべし、と」

艦船である以前に、女の子として扱わざるを得ないんですがそれは。

「後、小さな声で、指揮官の家に住ませれば生活費が浮くって……」

「あの猫ォ!!」と、心の中で叫んだ。完全に確信犯じゃないか！　頭を抱えた。生活費は間違いなく増えるだろう。

どうもあの明石には、良いように使われているような気がしてならない。身近で似たような経験をしているからだろうか。

「指揮官の事は、まだよく分からないです。でも……昨日の戦いで指揮官は綾波を信じてくれたです。だから……綾波も、指揮官を信じるです」

「綾波……」

良い子だ。俺は無茶な戦わせ方をさせたというのに。

そうなると、追い返すのも忍びない。新しい住居を探す方が金が掛かりそうだというのもある。

指揮官と艦船の関係、か。そんなの俺にだってまだよく分からない。
しかし、俺が今更どう理屈をこねようが彼女が俺の艦船であることは決定事項だ。何故なら、俺のプラモデルが無ければ、綾波は今此処には居なかったからである。ならば、責任を取るのが俺の役割だろう。
「分かった。俺がお前の面倒を見るよ」
「ありがとう、です。出来るだけ……迷惑はかけないのです」
後の事はまた、考えていけば良い。俺だって彼女に恩返しがしたいのだ。これで、彼女の住み家については解決だろう。
……ところで、もう一つ綾波に聞きたい事がある。だが、切り出す前に綾波が俺に問うた。
「ところで指揮官。指揮官の名前を教えて欲しいのです」
「……綾波さん？　それは、ひょっとして綾波さんが着てる服と関係がある？」
「はいです」
綾波は頷いた。
……正気か？
「明石が、一緒の学校に通ってる時に指揮官呼びは流石に不自然だ、と言ってたので――」

「ちょっと待って。どういうことなのか具体的に説明してほしいのだけど」
一体、俺が寝ていた昨日一日の間に何があった？　どうしてそうなっているんだ？
綾波の服装は、制服だった。昨日のセーラー服とはまた違う。
俺の学校の女子制服のブレザーを彼女は羽織っていたのである。
「今日から、指揮官と同じ学園に通うことになったのです」
もう一度頭を抱えた。この二日間で、どうも俺の世界は大分おかしなことになってしまったらしい。
これからどうなるのか、もう想像もつかなくなってしまった。
そうだ、綾波に教える前に自己紹介しておこう。誰にするわけでもない。取り合えず、このままでは俺は平静を保てそうにないのだ。もう取り乱しているかもしれないが。
俺は橋立蒼颯（はしだてそう）。世界と、周囲の人間関係がちょっと普通じゃなくなってしまった、しがない艦船マニア――そして、指揮官となってしまった男である。

●

「……始まった、のでございますね」
店の一角で、彼女は足をぶらぶらさせて佇んでいた。

朝からプラモデル屋にやってくる物好きなど居はしない。彼女一人だけだった。

「……あれだけいた認識艦船どころか、人型艦船も撃沈されるとは。やはり、何か持っているのでしょう」

誰に言うでもない独り言に聞こえた。

しかし、その言葉は間違いなく、もう返事を返してくれない「彼」に向けられていた。

「妾が陰ながら支援するつもりでございます。今更、表に出てくるつもりは、ありませぬ」

彼女は目を伏せた。何か、悲しみを堪えるような表情だった。

離別。そして孤独。全てを味わってきた彼女にとって、この店が最後の拠り所だった。

「うつけな姉が戻って来るまで、この場所を離れるわけには……いかないのでございます……」

彼女の目の先には、遺影代わりの名誉店主の肖像写真が立て掛けられている。髭を生やした老人が少し恥ずかしそうに微笑んでいた。

「……やはり、答えてはくれないのですね。——指揮官さま」

第二話：艦隊激突（前編）

「利根の消息が不明ですって？」
寝殿の奥で、妖艶な女の声が響く。
赤い炎が御簾の奥からぼんやりと光っていた。
「利根は我々一航戦の忠実な麾下。離反するとは考えられません。何があったのでしょう」
蒼い炎が御簾の奥からぼんやりと光る。静かな声が何かを憂うように唸った。
要件は唯一つ。認識艦船を率いて横須賀を強襲しに行った重巡洋艦・利根の行方だった。彼女はこちらに連絡一つ入れず、多数の認識艦船諸共消息不明になったのである。
当然、上司である二人が看過出来る事ではなかった。
「ならば結論は一つね。利根は沈められた」
妖艶な声は案外早く、利根の死を断定した。
「索敵・連絡を優先する子だもの。理由も無く消息を絶つわけがない。となれば、沈められたのが確実よ」
「横須賀に三十年前の生き残りが？」

冷徹な声の女は、眉を顰めた。
妖艶な声は忌々しそうだった。
「……散り散りになっただけ、としか私は聞いていないわ。でも、少なくとも私達に対抗できるだけの勢力ではないはず。となれば、彼女を討ったのは私達を嗅ぎ回っている【ユニオン】の艦船である可能性が高い」
煙管を弄んでいる妖艶な女は「まあでもいいわ」と余裕げだった。
「代わりは幾らでも居るもの。利根くらい、【人形】で十分よ。むしろ、あそこに何かあるって分かっただけ、必要な犠牲だったわ」
皮肉も何も混じっていない、本心からの言葉だった。所詮、彼女にとって部下の命は自らの崇拝する「カミ」の目的を果たす為の駒に過ぎないのである。
「……良いわ。遊びたいというのなら付き合ってあげましょう。放っておけば、どうせ面倒になるもの」
●一
「國方（くにがた）　綾波（あやなみ）です。よろしくです」
三笠公園に隣接する何の変哲もない公立高校・海藤学園高校にやってきたのは唐突な転校生だった。
うちの学校に駆逐艦が転校してくる。と言ったら、今度こそ同級生に「そうかそうか、

そろそろ病院行こうな。頭の」って引きずられそうだから止めておいた。
噴出しそうな問題は幾らでもある。
この三日間程で俺の中の常識と言う常識が音を立てて崩壊している。
もう一度繰り返そう。
うちの学校に駆逐艦が転校してくる。
何事も無かったかのように朝のＨＲで偽名を使って自己紹介をする綾波を、俺は頭を抱えながら眺めているのだった。
「なあ蒼颯。國方サン……だっけ、クッソ可愛いよな。なんか、こう、ミステリアスな感じがさあ。まさか電撃転校生かあ、この年になってラノベみたいな展開に遇うなんて思わなかったぜ」
アニメオタクの一馬が隣の席で、にやにやしている。家は焼けたが、妹さんは何とか助かったらしい。一日経ったのもあってか、一先ず立ち直ってくれて何よりだ。昨日は流石に休んだが、学校に教科書を置いていたのが功を奏したのもあって、一先ず学校には足を運ぶ事にしたらしかった。今はホテル暮らしをせざるを得ないという。
大変な目に遭っている彼だが、いきなり転校してきた彼女に目を輝かせていた。せめてもの慰めが出来たのだろう。いや、本当に火事のショックで何とか体裁を繕っているのかもしれないが。

「……でも駆逐艦なんだよな」
「今何て？」
「何でもない」
漏れてしまった口を抑え、首を横に振った。
「そうかあ、あやなみちゃんかあ、名前も可愛いなあ、何か世紀末ヲヴァンゲリオンのヒロインの苗字みたいな名前だけど」
「苗字じゃなくて名前だからセーフだ」
「綾波」は苗字にするべきではない、とあの猫耳工作艦も気付いたのだろう。確かに某アニメで有名ではあるが、あの苗字は現実には存在しないからである。
あの猫がアニメを知っているかはこの際さておき。
「そっかぁ、にしてもちっこい子だなあ、最初中学生かと思っちまったぜ」
「女子の身長は大体こんなもんだろう」
誤魔化す為に俺は適当を言った。
一馬の言う通り、綾波は高校二年生の他の女子と比べるとやはり幼く見えるのである。
流石に小学生と言うほどではないが、大体中学一年生、せいぜい中学二年生と言った所だ。

明石は幼女なのに対し、あの利根は大人びた容姿だったので、ＫＡＮ―ＳＥＮというのは艦種によって容姿が決まって来るのだろうか。いや、それ以前に成長するのか彼女達は。

「ところでお前、結局学校に来れてるけど大丈夫なのか？」

延々と綾波の話をされていると、何時か俺が墓穴を掘りそうなので話を変えることにした。

いつも通りに振る舞っている一馬だが、火災もとい砲火で色々燃えて大変だったのではないだろうか。

「ああ。無事な家具とか結構多くてな。鎮火した後、昨日のうちに全部運びだしたんだ。うちは貰い火事だったからな」

案外けろっとした表情で彼は答えた。

「そうか。それは、不幸中の幸いだったよ」

「だけど最初に焼けたのが妹の部屋だったからな。それで、あいつは大火傷だ」

彼の表情が暗くなった。しまった、辛い事を持ち出してしまったか。

猶更、あの艦船達を沈めなければ横須賀は危なかった事が分かる。そもそも人も何人も死んでいるらしい。

俺はあの時、戸惑ったり躊躇している場合ではなかったのは確かだ。それでも――心

残りが無いわけでは無かった。
「今は回復するのを祈るしかない、か」
「ああ。だけど幸い命に別状は無ぇよ。それだけで十分だ。それにな」
にひひ、と彼は笑みを浮かべる。何処か悲しそうだった。
「焼けた町を見るより学校に来てた方が気が晴れるんだ」
「……一馬」
俺はそれ以上は言わなかった。この一件は、彼の心に決して小さくない傷を負わせたようだった。
クラスを見ると、ちらほら穴が開いている。幸い、生徒の中に死者は居ないようだが、火傷をして入院した者、後処理で学校に来ることが出来ない者、と様々だという。
街にはマスコミが押しかけており、現地の情報を伝えたいのやら救助及び復旧作業の邪魔をしたいのやら分からなかった。
「それじゃあ、國方さんはそこの空いた席で……」
「はいです」
綾波の声。彼女の方に視線をやった。
表情が変わらないので、緊張しているのやらしていないのやら分からない。
が、問題はその隣だった。

「おーっほっほっほっ」
高笑いが聞こえて来る。どっちかというと鼻につく部類の声だ。
「また私のクラスに庶民が転校してきたのね！　この至上の才能の持ち主たるこの私の隣にやってくるなんて何て運が悪いのかしら、おほほ」
「うわぁ、よりによってクラスのクイーン、八島宮子（やしまみやこ）の隣かよ、國方さん可哀想」
茶色の髪をドリル状に結ったお嬢様のような見てくれの八島さんだが、実際父親が客船会社の社長らしい。
それゆえか大金持ちのボンボンである、と専らの評判だった。
そして勉強、運動のどれをとっても悔しいことに非の打ちどころがなく、教師を金で買収したのではないかというあらぬ噂が流れた程だが、恐らく実力ではないかと俺は踏んでいる。
しかし、あの絵に描いたような高圧的な性格はどうにかならないのだろうか。
「……本当、色んな意味で可哀想だな」
呟いた俺。
「それじゃあ連絡するぞー」と担任の教師の間延びした声。
今日もまた学校での一日が始まる。
だが、今日ほど「これから」が不安な日は無かったと言えるだろう。

●二

という俺の心配に反し、綾波は思った以上にクラスに溶け込んでいた。

女子から質問攻めを受けるという通過儀礼が過ぎた後は平穏そのものだった。

俺は綾波と話す暇も無く、ただ彼女に任せるしかなかった。

元々大人しい性格の彼女は、特別目立つような行動も取らず、授業も唯只管一心にノートにメモを取っているようだった。

英語の授業でもそれは同じだ。彼女は特に発言はしないが、特に目立つ事もしない。

前でレン先生をからかっている馬鹿のようなことはしない。

「今日も補修してほしいのかしらぁ!?」

「ひぃーん!!　そりゃねぇぜ、レン先生ェ!!」

「いやあ、先生が平常運転で何よりだぜ」

流石に学習したのか授業中にはスマホを弄らなくなった一馬だったが、今度は絶賛レン先生をウォッチングしていた。

彼は二次元三次元に関わらず、美女に目が無いのである。さっきまで綾波に首ったけだったのに節操というものは無かった。

俺は無言で肯定も否定もしない。

「それじゃあ教科書の次の所――」

言いかけたレン先生がこちらを向く。
視線は俺――ではなく、その後ろの方に座っている綾波に向いていた。
ほっ、と胸を撫で下ろす。当てられたわけでは無かったようだ。
正直、考え事が立て込んでいて教科書を追っている暇など無かったのである。
だが綾波は英語は読めるのだろうか。重桜という国が何なのか分からないが、それでも俺はまだ彼女を帝国海軍の艦艇のそれだと思っている。
だから、適性言語だった英語を話せるのだろうか、という疑問が湧いてくる。しかし、よく考えたら海軍だと割と英語使ってたんだったな。
そんな事を考えていたが、レン先生の言葉が先程から途絶えている事に俺は気付いた。
彼女は、呆けた様子で唯綾波の顔を見つめているようだった。
「レン先生ェー、どうしたんすか？　またエロい事考えたんすか？」
「……いえ、なんでも」
何時に無く彼女の返答は静かだった。
問いかけた馬鹿は首を傾げる。いつものような反応が返ってこなかったからだろう。
どうしたんだろうレン先生。今日は心無しか元気がないように思える。
「……いえ、國方さんはまだ転校してきたばかりだから、代わりに東雲君、読んでくれる

？」

「えっ!?　俺っすか!?」

そう一馬が言いかけた時だった。

チャイムが鳴る。四時限目の終わりというのもあり、腹を空かせた生徒がガラガラと音を立てて立ち上がる。

「はぁ、時間ね。じゃあ号令をかけるわ――」

今日のレン先生は、何処か変だった。

教室から雪崩れるようにして出ていく生徒達。

昼食の弁当やパンを買いにいくのだろう。レン先生もそそくさと出て行ってしまう。

が、一馬が「すんませーん、先生ェ！　俺此処ちょっと分からなかったんですけど」と追いかけていくのが見えた。授業で分からない事があったらすぐ聞きに行く辺り、彼も心を入れ替えたのだろうか。否、単に先生と話す口実が欲しかったのかもしれないが。

「指揮官」

俺は肩を震わせた。

胸が飛び出すかと思ったぞ。

「おま、ちょっとこっちに来い！」

「うん？　なんですか」

彼女と人込みを逆行して、特別棟の廊下に連れ出す。
不思議そうな顔をする綾波に、俺は思わず小声で言った。
「お前な、学校で〝指揮官〟呼びは止めてくれよ……。俺とお前は知らない間柄同士ってことになってんのに」
「あっ、しまったのです。つい、まだ抜けなくて」
「ここでは俺とお前には上下関係とかは無いんだからさあ。で、どうした？　今日半日学校行ってみて困った事とか無かったか？」
「授業はよく分からないですけど、先生の言ってるバンショ？　はノートに全部写したのです」
「そうか……」
ひょっとして勉強とか、後で教えてやらないといけないのだろうか。
彼女の実際の知能レベルがどれほどなのか分からないが、出来ない事は無いと思いたい。
だけど律儀に板書を全部写している辺り、真面目なんだろうな。
「でも、本当に……よく分からなかったです。学校って、どうして行くのですか？」
「え？」
「勉強をして大学に入ったり就職する。……此処はそういう場所だと聞いたのです。で

も……綾波は艦船です。役割は何処まで行っても戦うことなのです」
「それは……」
俺は答えに困った。
明石はどうして、彼女を学校に行かせようだなんて思ったのだろう。
分からない。俺にだって。
どうして学校に行って勉強するのか、だなんて大して考えた事も無かった。
ただ、周りもそういうしているから俺もそうしていると言えば嘘ではない。
むしろ家でずっとプラモデルを作っていたいと思う日さえあるのだから。
かと言って、そうすることが良いとも思えないのだ。
結局、俺はどちらが正しいのかもどうしてそうするのかも分からず、答えることから逃げた。
「それより、綾波。お前お昼ご飯はどうするんだ？」
「昼……そういえば、そのことについて聞きたいことがあったのです」
そもそもＫＡＮ―ＳＥＮは食事をとるのだろうか。
いや、明石がモンヌターエナジーを飲んでいたので、恐らく飲み食いは出来るはずだ。
「お昼、何も持ってきて無かったのです。綾波もお腹が空くのです。どうしたら良い、ですか」

「明石の奴、何も食いモンを持たせなかったのか……いや、あってもモンヌターエナジーしか持って無さそうだなアイツ」
仕方がない。今から売店に行っても混んでいそうだ。
だから俺は大抵、家から食べ物を持ってくる。
「俺のパン、分けてやるよ。お腹空いたら、また放課後にでも何か考えておくわ」
「良いんですか？」
「ああ。だけど今度からはお前の分の飯を考えないといけないのか……」
その辺り全部丸投げされたので皺寄せは俺にやってくる。
もう仕方ないと割り切るしかない。
「……ごめんなさい。早速迷惑を掛けたです」
「何言ってんだ。艦船に補給は必要で、人間も同じだ。ちゃんと食わないと午後から力出ないからね」
そう言って、俺が綾波の手を引いた時だった。
「あら。綾波さんと……橋立君ね？」
俺は肩が跳ねた。
振り向くと、そこに立っていたのは眼鏡を掛けた中年の女性。
その人物を見て、俺は思わず飛び退いた。

「……校長、先生」
「そんなに驚かなくても良いでしょうに」
「校長先生。こんにちは、です」
綾波も面識があるらしい。
転校手続きの時に顔合わせでもしたのだろうか。
「いや、でも、珍しいですね。こんな時間に校長先生が教室を見て回るなんて」
「転校生の綾波さんがよくやっているか見に来たのよねえ」
面倒見が良い事は知っているが、それでもわざわざ転校生の受けている授業を見に来るものなのだろうか。
この人に関しては掴み所が無く、まだどんな人なのか分からない所がある。
物腰柔らかい人、という大雑把な認識ではあったが……。
「ところで橋立君は転校生のお世話をやってるのかしら?」
「いやあ、まあ……そんなところで」
「これもまた出会い、というものよねえ」
そう言うと、彼女は何処からともなく半紙を取り出す。
墨で、でかでかと「一期一会」と書かれていた。
「……何すかそれ」

「私はこれでも国語教師だったのよ。書道もやってたわ。というわけで今も毎朝一筆書くのを習慣づけているわけ」
「何で持ち歩いているのですか？」
「飾ろうと思ってたのよ。今日のは特別良い出来ですもの」
そんな趣味があったのか。
国語教師だったというのは知っていたが、書道の段も取っていたのだろう。
「でも、これは綾波さんにあげましょう」
「……ありがとです」
受け取ったのは良いが、それは恐らく俺の家の何処かに飾られる事になるだろう。
困るんだよなあ、置く場所。
「じゃあ、私はそろそろ行くわ。二人とも、仲良くね」
そう言って校長先生は去っていく。
何だったのだろうか。
半紙を渡すだけ渡して行ってしまった。
単に生徒に絡みたかっただけ……？
いや、違う。何か意味があったのかもしれない。
「……まさかな」

「指揮官、どうしたですか？」
「……いや、俺あの人と話した事無いのに何で名前知ってたのかなあ、って」
「校長先生って学校の生徒の名前を全部覚えてるものだと思ってたです」
「まさか」
ともかく――明石への質問が増えた。それだけの話だ。

●三

放課後、俺は綾波と一緒に秘匿ドックへ向かっていた。
三笠公園の近くなので、必然的に彼女も海辺に佇む戦艦を見ることになる。
息を呑む彼女は「あれが……三笠」と感動しているようだった。
しかし、今日の目的地はその近辺にある鬱蒼とした林。一昨日と全く同じ場所に確かに怪しげな蓋があった。
すると、スマホのアズールレーンアプリが勝手に起動する。画面を見ると、「ロックを解除しますか？」とあったので「はい」を押すと蓋が開いて通路に続く。
ドック自体は古そうだったが、かなりハイテクな仕組みなのだろうか。アプリとの通信でロックを解除するようになっているのだろう。
「此処からドックに入るのですね」
「ああ……にしても明石の奴、居るよな？　これで居ないってことはないよな」

彼女の秘匿ドックには相変わらず他に誰も居ない。
働いているのは彼女のみらしい。広々としたこの施設のどこかに彼女が居るというが、やはり工廠に籠っているのだろうか。
「おーい、明石ー。いるんだろ――」
扉を開けると、俺の眼前には雪崩れた段ボールが広がっていた。
一体何が起こったのだろう。そういえば、無造作に色々荷物が積まれていた気がする。
にしても、これを片付けるのは大変そうだ。
そう思っていた矢先――段ボールの中から見覚えのある袖が見えた。
「指揮官。あの袖、綾波見たことがあるです」
「ああ、俺もだ。綾波、手伝ってくれ」
「了解です」
綾波と一緒に周りの段ボールをどけて、腕があるであろう場所を掴んで、引っ張り上げると、目を回した猫娘が段ボールの山から飛び出してきた。
「し、死ぬかと思ったのにゃ……」
「どうしたんだよ一体」
「装備品の整理をしていたら、段ボールが崩れてきたにゃ……」

「装備品ってなんの装備品だよ」
「そりゃあ勿論、ＫＡＮ―ＳＥＮの装備品だにゃあ。彼女達の兵装は割と簡単に取り換えが利くのにゃあ」
そういったものがあるのか。
となると、綾波の艤装も今より更に強くできるということなのだろうか。
いや、それよりも今日はたっぷりと聞きたい事があったのだ。
「なあ明石――」
「おーっとそれよりも先に見て欲しいものがあるにゃ」
言った明石は工廠の奥にあった、建造ドックを俺達に見せる。
綾波が生まれた場所である其処には、カーテンが敷かれており、コンピューターには「建造中」と映し出されていた。
「明石、これって一体？」
「新しいＫＡＮ―ＳＥＮですか」
「その通りにゃ！　こないだの戦いで、利根の轟沈地点から回収した汎用メンタルキューブの欠片で、新たな艦船を建造することに成功したにゃ！」
「なあ、前から思ってたんだが、そのメンタルキューブって何なんだ？　というか、お前達ＫＡＮ―ＳＥＮって結局何なんだ？」

「あー、こほん、それについて説明するのは長くなるかにゃあ」
　わざわざ個別に質問する手間が省けたといったところか。
「前も教えたと思うけど、【ＫＡＮ－ＳＥＮ】とは【動力学的人工海上作戦機構・自律行――」
「だから長ぇよ！」
「せっかちだにゃあ。まあともかく、不思議な物体・メンタルキューブから生まれる人型の艦船だにゃ」
　つまり、彼女達はあくまでも人型であって人間ではない。
　しかし、心もあれば人格もある存在だ。
　……アンドロイドにしては有機的で、人間にしては能力が人並外れている。本当に不思議な存在だ。
「そして、このメンタルキューブは人型の艦艇を量産出来るのにゃ。つまり、明石が二隻以上いる事も有り得る、ってことにゃ」
「コピーって言いたいのか」
「これを明石達は「駒」と呼ぶのにゃ。指揮官はプラモデルを作るけど、プラモデルはオリジナルの艦船ではないのと同じにゃ」
「そりゃそうだ。大きさも細部も全然違うし内装なんて無いも同じだ」

「そしてプラモデルは大量に量産出来るにゃ。「駒」とはそういうものだにゃ。……最も、この世界ではなかなかメンタルキューブが手に入らないから、それすらも難しいんだけどにゃあ」
「そうか……じゃあ、明石達のオリジナルも居るのか？　プラモデルを作るなら金型が必要だ」
「カンが良いのにゃ。ＫＡＮ―ＳＥＮにもオリジナルである「素体」が存在するにゃ」
「素体……それは何処に居るんだ？」
「分からないにゃ。でも、明石は確かに「素体」は居るって確信してるにゃ。明石が何かヘマをすると、どっか遠い所から怒られるような気がするし……あと、ぼんやりと向こうから何か声が聞こえてくることがあるにゃ」
「……そうか」
俺は綾波を見やった。
彼女は首を傾げる。
綾波も模造品でしか無いというのだろうか。
彼女と同じ顔で同じ姿をした綾波が、何処かに居るのだろうか。
何処か引っ掛かりがあった。こんなに姿かたちは人間そのものだというのに。
「じゃあ、もう１つ聞きたい。お前達は第二次世界大戦の艦艇なんだろ？　なのに、一昨

日沈められた利根は重桜だとか何だとか言っていた。お前達は「日本」の艦艇じゃないのか？」

「……それについては、ちょっと難しい問題かにゃあ」

明石は難しそうな顔をした。

「これは、明石もまた聞きみたいなもので、おぼつかないところがあるにゃ」

「どういうことだ？」

「宇宙の何処かに水の惑星があったにゃ。そこでは豊かな文明が存在していた……明石の記憶には、そうあるにゃ」

「水の惑星――それは地球じゃない別の星ってことか!?」

驚いた。

まさか彼女達は宇宙人が作ったとでもいうのだろうか。

「正確に言えば、この地球とは似て非なる地球、ってところだにゃ。まあ地球と呼ばれていたのかどうかも怪しいけど……メンタルキューブの技術はその世界のものだにゃ」

「じゃあ、利根の言っていた、日本とは似て非なる国ってのは……」

「その地球にある日本――重桜の事だにゃ」

平行世界か、それとも本当に別の惑星なのだろうか。

少なくとも彼女は「地球」と言っていた。

この惑星とそんなに変わらないのだろう。
……いやいや待て。
「いきなりそんな事飲み込めるかよ!?」
「現にこうして明石達が存在している事が何よりの証拠にゃ。指揮官はこの世界の技術で明石達の存在を説明出来るかにゃ？」
アンドロイド、ロボット、クローン人間。
残念ながら彼女達はそのいずれかにも当てはまらない。
量産が出来る上に人格を持った人型の艦船。
今はそうとしか呼ぶことが出来ない。
「……何なんだ本当に。いきなりパラレルワールドの話とか出て来るし、どうなってんだ俺の周りは」
「コホン、〝その世界〟では〝この世界〟と同じ、二度に渡る世界大戦が起こったらしいにゃ。明石達ＫＡＮ―ＳＥＮは唯の軍艦だった頃の記憶もあるけど……それは、この世界での明石の艦歴とそんなに変わらないにゃ」
「要は、似た歴史を辿った似て非なる別の世界の日本……それが重桜ってことか」
「そうにゃ。しかも、大体世界地図はどっちも同じらしいにゃ。違うのは大戦後に辿った歴史かにゃあ」

他にも違いは結構あるけどにゃあ、と明石は付け加える。やはり全く同じというわけではないらしい。

だが、一番大きな違いが存在する。

「最たるはＫＡＮ―ＳＥＮが生まれたか否か、ってことか」

「そうだにゃ。人型の艦船がその世界で生まれたのは、大戦の後。その目的は明石には分からないけどにゃ」

となるとメンタルキューブの技術もその世界から持ってこられた、ってことか。

頭が痛くなってきた。

「じゃあ明石は何で此処に居るんだ？　もっと言えば、この世界に何でそのＫＡＮ―ＳＥＮが居る？」

「……セイレーンから、この世界を守る為だにゃ」

「セイレーン？」

彼女は頷いた。

「二十年くらい前、この世界にはメンタルキューブが流れ着き、それを追うようにして謎の生命体・セイレーンが現れたらしいにゃ」

「な、何だよ、そのセイレーンって……」

「目的は不明。だけど、奴らは海を荒らしまわり、何隻もの船を沈め、まさに今の認識艦

船のように見えない脅威となったにゃ」
　言い換えれば、それはＫＡＮ―ＳＥＮでしかセイレーンとやらには対抗出来ないということだった。
　俺の、世間の知らない間にそんなものが居たというのか。
「セイレーン……！　何なんだそりゃ」
「まあ、残っている画像は少ししかにゃいのだけど」
　言った明石はコンピューターに画像を映し出す。
　現れたのは、鮫か鯨とも似つかない魚の形をした機械の姿だった。
　あちこちが破損しており、無機物とも有機物とも言い切れないそれは何となく艦船達に通じるものがあった。
「これは……！」
「鹵獲したセイレーンの一部らしいにゃ。全容は今となっては不明だけど……現物もあるから見てみるかにゃ？　何処に仕舞ってたやら……」
「いや、それはまた今度で良い。明石も、セイレーンの現物を見たことがあるのか？」
「明石が建造された頃にはセイレーンとの戦いは終わっていたのにゃ。そして、かつてこのドックに居たＫＡＮ―ＳＥＮは殆どが沈められて、生き残りは僅かしか居ないらしいにゃ」

「そんな……じゃあ、明石を建造したのって誰なんだ」
「前任の指揮官だにゃ」
「――！」
　そりゃそうだ。
　彼女は言った。艦船にはそれを指揮する指揮官が必要だ。
　かつて、このドックで指揮を執った人間が居るはずなのだ。
「名前は聞いてなかったけど、しょっちゅうこのドックで会ってたにゃ。良い人だったにゃ。でも、もう亡くなったと聞いたにゃ」
「……そう、か」
　一体どんな人なんだろう。
　一度で良いから、会って色々聞いてみたかったものだ。
「でも、何故その人は明石を建造したのですか？」
　問うたのは綾波だった。
　明石も首を捻る。
「いずれまた、脅威はやってくる。その時に備えてくれって言われたのにゃ。準備とかの類は工作艦の得意分野だにゃ」
「でも襲ってきたのはセイレーンじゃなくて重桜の艦船だった。これはどうなってるん

だ？」
「それは……分からないにゃ」
「分からない？」
「そうにゃ。明石も、日本近海で認識艦船が暴れているのは知っていたけどショックだったにゃ。でも、何か黒幕が居るのは確かだにゃ。彼女達は、こっちには存在しない重桜をこっちで建国しようとしているんじゃないかにゃあ」
利根の話を聞く限りはそうらしい。
奴らは無理矢理でも領土、そして領海を奪い取るつもりなのだろう。
無茶苦茶な話だ。
国を建国するなんて、大それた話だ。
俺達がやっているのはひょっとして、見えない国盗り合戦なのではないだろうか。
「……利根さん」
綾波が小さく呟いた。
やはり、同胞と戦ったのは少なからず彼女もショックだったのだろうか。
「一つ言えるのは、信号の波形が全く違う事、そして人類に敵対していることから彼女達は完全に敵だということだにゃ。例えかつての同胞でも、彼女達は容赦なく沈めてくるはずだにゃ。この間のように」

「どうにかならねえのかな……綾波だって、同じ重桜の艦船とそう何度も戦いたくはないだろうし」
「……綾波は、大丈夫です」
　言ったのは綾波だった。
「指揮官。ＫＡＮ―ＳＥＮとはそういうものなのです。例え、同じ陣営の艦でもそれを指揮する指揮官が敵同士ならば戦えるように、作られているのです」
「だけど――」
「そんな事より、もっと聞きたい事があったのではないですか？」
　話を逸らすように彼女は俺に吹っ掛ける。
　そうだ。問い質したい事はＫＡＮ―ＳＥＮの来歴だけじゃないぞ。
「……明石。もう一つ聞きたい事がある」
「何にゃ？　もうあらかたＫＡＮ―ＳＥＮについては語り尽くしたにゃ」
「綾波についてだよ。お前、どうやって綾波をうちの高校に入学させたんだ!?」
「にゃっ!?」
　明石の長い髪が逆立つ。
　あからさまに動揺しているようだ。
「そ、それは……色々と秘密かにゃあ」

「オイ！　というか、何で綾波が学校に通う事になってるんだ！」
「そ、それも秘密かにゃあ。明石は実は前任者との関係もあって色々コネがあるんだけど、その人に口止めされてるんだにゃあ」
　ということは、この小さな猫娘の背後には案外大きなものが関わっているということか。
　少なくとも教育委員会か、あるいは――
「それよりも指揮官にまた頼みがあるのにゃ！」
「何だよ。まだ話は終わってねーぞ」
　苛立つ俺に猫娘は建造ドックを指差す。
　指はダボダボの袖で見えないけど、俺はそちらに目をやった。
「実は、今建造している艦船は「祥鳳」。そっちで言えば帝国海軍の軽空母だにゃ！」
　話が一周して戻って来た。
　つまり、今カーテンの向こうで建造されているのは軽空母――
「って、軽空母ォ!?」
　俺は腰を抜かした。
　駆逐艦から一気に飛躍したな。
　艦載機が武器になるのは大きいぞ。この間のように瑞雲で苦しめられる事も無い。

「航空母艦、ですか。建造できれば、大きな戦力になるはずです」
「だけど、それを完成させるには完成品のプラモデルが必要だにゃ」
丁度良い。
軽空母――祥鳳なら、今しがた作っていたところなのだ。
ぬいさんに九割引きで売ってもらったものだ。
「指揮官の腕を見込んでってことで此処は一つ頼むにゃあ」
「……まあそこまで言うのなら。にしても、どうしてプラモデルが建造の仕上げに必要なんだ？」
「メンタルキューブが艦船のイメージを取り入れるためらしいにゃ。どうもこの世界では、メンタルキューブの働きが不安定で、色々工夫しないといけなかったらしいにゃ」
そこだけがどうも俺には理解できないのだった。
イメージ、か。認識とかイメージとか、人の脳に直接働きかけるような言葉が多い。
どうもこの辺りの技術はまだ分からない。そもそも誰がどうやって作ったのだろうか。
「とゆーわけで！　明石はまだ仕事がいっぱいあるからさっさと出るにゃあ！」
「あっ、おい、こら！」
明石が作ったらしい人型のロボットが段ボールをせっせと片付け始めた。

仕事にどうも俺達の手伝いは不要らしい。
俺達は明石に追い出されるようにして工廠を出たのだった。
「……肝心な所だけはぐらされてしまった気がするです」
「俺もだ」
明石の協力者とは一体誰なのだろうか。
それだけが分からず仕舞いだ。
しかし、決して小さな権力の持ち主ではないということは分かる。
「指揮官は、やっぱり引き受けるのですか？　プラモデルの件」
ドックの入り口がある林を潜りながら、綾波は問うた。
確かに明石は何かを隠しているし、胡散臭い。
「……引き受けるっきゃねえよ」
だが、俺は言い切った。今更後には引き下がれない。
それ以上に――
「これは俺だけに出来る事なんだ。認識艦船は俺にしか見えないし、お前達の指揮も俺にしか出来ない。そして、プラモデルもだ」
これぱかりは誰かに頼むわけにはいかない。
プラモデル作りは俺の自慢の特技。

プラモ屋のお爺さんに長い事仕込まれた大事なものだからだ。
「よろしくです。指揮官」
綾波が薄っすらと笑みを浮かべたように見えた。
陽は落ちていて、よく見えなかったけど、そんな気がした。
「……本当、話し込んでいる間にすっかり暗くなっちまったな……」
「指揮官。お腹が空いたです」
「悪い悪い、昼も結局パンだけだったしなあ。ラーメン屋にでも行こうか」
「ラーメンですか。嫌い、じゃないです」
綾波が目を輝かせた。
彼女の記憶にラーメンの美味しさがインプットされているのだろうか。
そういえば、ラーメンって戦前からあったんだよな。乗組員が食べた記憶でもあったのだろうか。
「ラーメン、好きなのか？」
「昨日、明石が御馳走してくれたのです」
何だ。あいつ意外と料理出来たんだな。てっきり主食はモンヌターエナジーだけかと思っていたぞ。
「カップにお湯を注いで三分待つだけで出来るのです」

「……」

俺は押し黙った。

明石の食生活が本格的に心配だ。

インスタントラーメンにお世話になることは俺だってある。

あるが、毎日それってわけにはいかないだろう。

「綾波。それも美味しいかもしれんが、俺が本当のラーメンというものを教えてやろう」

「本当のラーメン、ですか」

俺達は早速、近くにあるラーメン屋「雷電軒」の前に立っていた。

あんまり転校生連れて二人で食事というのもどうかと思うが、まあ良いだろう。

店主とは見知った顔だし。

それにこんな時間に、帰り際にラーメン屋にわざわざ寄るような酔狂な奴は居ない。

大抵寄り道する前に皆電車に遅れるので駅の方へ行ってしまうし、お腹が空いても駅ビルの店で食べているはずだ。

よって、クラスの誰にも会わないだろう。俺はそう踏んでいた。

「ここがラーメン屋、ですか」

「ああ。馴染みの店なんだ。おススメはチャーシューが山ほど入った雷電特盛豚ラーメンだな。まあ綾波は女の子だからそんなに食べれるかは分からねえけど」

とりあえず俺は色々あって疲れているので、今なら何でも食べられそうな気分だ。
言った俺は店の戸を開ける。
「すんませーん、おやっさん――」
「美味しい！　美味しいですわ！　此処のラーメンはやっぱり至高ですわ！」
俺は思わず戸を閉める所だった。
彼女は気付いていないのか、ずるずると麺を啜っている。
「そうかい！　八島の嬢ちゃんに気に入られてるとこっちも腕が鳴るってもんだねえ！」
「いえいえ、こちらこそ。やはりラーメンは魂の料理ですわよ。おほほ――ん？」
カウンター席でおやっさんの前に座ってラーメンを啜っているお嬢様と目が合ってしまう。
あーあ、気付いちまったか。
「おーう、坊主！　どうしたんだ！　腹減ってんじゃねえのか!?　早よ空いてる席に座れや」
おやっさんの野太い声が聞こえて来る。
その前で箸を取り落としそうになる少女。
そんな彼女の名を綾波は呟いた。

「八島さん？」
「あああ、見られたぁぁぁーっ！　転校生に！　そしてオタクに！」
「俺はそういう認識か」
「何であなた方が此処にぃ!?　部活帰りの生徒が絶対やってこない時間帯を選んだのにぃ！」
「だ、大丈夫！　誰にも公言しねえから！」
「ははははは！　確かに八島の譲さんは、見掛け通りのキャラで通ってるらしいからな！　坊主、黙っててくれるかい」
おやっさんは事情を知っていたのか豪快に笑い飛ばす。
残ったラーメン、そしてスープを飲み干した彼女は水でそれらを喉に押し込んだ八島さんは「お勘定！」と言って代金をおやっさんに差し出し、俺を押しのけて店から出て行ってしまった。
「……意外と庶民派だったんだな」
キャラが周囲に定着しているのも色々大変そうだ。取り合えずこの事は黙ってておこう。
「ははは、あの子も立派な常連だぜ。まあ、色々あるみてえなんだ。それよか坊主、食いに来たんだよな？」

「ええ、勿論」
「横に居るのは……見ねえ顔だな？」
「綾波です。よろしくです」
「転校生なんですよ。俺の家――の近くに住むんで、色々この辺の事教えてたんです」
「そうか！　まあ食っていきな！」
余計な詮索をしてくれないのは助かる。
濃厚なスープとは裏腹にさっぱりしたおやっさんの性格もあって、この店は平日の昼間に会社員や作業員で賑わっているらしい。
「最近は駅の方にチェーン店がいっぱいできて、学生はそっちに流れちまったからなあ。坊主みてえな客はやっぱ貴重だぜ」
「やっぱ此処の味が一番ですよ。取り合えず、雷電特盛豚を」
「今日は張り切るなぁ、良いぜ。嬢ちゃんは？」
メニュー表を睨んでいた綾波はそれを手放すと、涼しい顔で言ってのけた。
「では、綾波も雷電特盛豚ラーメンでお願いするです」
……嘘だろ？
最初はおやっさんも俺も耳を疑った。
出されたのはこんもりとチャーシューとモヤシが乗っかり、麺の見えないラーメン。

雷電特盛豚ラーメンとは、豚のラーメンではなく豚の餌ラーメンという意味で、当初はおやっさんは本気でそう名付けようとしていたらしい。

それ程にボリュームがＭＡＸなのだ。

「……綾波。食えるの？」

「余裕です」

「嘘だろ嬢ちゃん!?　……坊主。嬢ちゃんが残した分は全部食えよ」

「何でだよ!?」

「いただきます、です」

湯気が立ち上るラーメンを静かに啜る綾波。

それを見守る俺とおやっさん。

大丈夫だろうか。何時箸が止まるだろうか。

そう思っていたのだが――

「……全然止まらねえな」

十分経過。俺も隣で食っていたが、彼女は静かに麺を啜りながら全くペースを落とさない。

余程お腹が空いていたのか、それとも彼女がＫＡＮ―ＳＥＮだからかは定かではない。

彼女は終始涼しい顔で雷電特盛豚ラーメンを平らげていたのである。
「……美味しかったのです」
「マジかよ……」
俺は頭を抱えた。
食費、考えないとなあ。
●四
我が家にようやく帰って来た。
一先ずやるべき事は決まったが、綾波に一通り家の事を教えておかなければならない。
とりあえず、空いている部屋を教えてやる。
しばらく使ってなくて埃っぽいので、後で掃除もしないとな。
「それにしても、結構大きい家です。指揮官一人で住んでるのですか？」
「……まあ、色々あってな。そんな事よりトイレやお風呂の場所を知りたいだろ。そっちも案内しとく」
にしても女の子と同妻状態か。
これ、他の誰かに知られたら色々まずくないか？
俺の中でも、綾波が人間ではないということで一応ＯＫを出しているが倫理的にはＯ

ＵＴである。
だが、そもそも俺の他に綾波の面倒を見れる人間も居ない訳で仕方ないのだ。
そんな事を考えながら、一通り家の中の事を教えた俺は、風呂を掃除して風呂が沸いたと機械が知らせたら入っても良いと綾波に教えると、一人部屋でプラモデルを作る準備をしていた。
綾波は一日疲れたのか、風呂が沸くまでの間リビングで机に突っ伏している。
だが、疲れたのは俺も同じだ。
「……こうなると今まで以上にプライベートの時間とか確保しにくくなるんだろうなあ」
一人暮らし同然だったのだ。
間違いなく自由とは縁遠い生活になるだろう。
「……まあ、元に戻った、というべきなのかなあ」
だが、それでも違和感無く誰かと生活することを受け入れられているのは、一人になった空間に、また誰かが戻ってきたからだろうか。
……やめよう。この事を思い出すと、無性に悲しくなってくる。
また、ただの趣味だったプラモデルも「やらなくてはいけないこと」になってしまったので重荷にならないか不安だった。

とはいえ、こうして目の前に制作中のプラモデルを置くとやはり高揚感は隠せない。
途中だった飛行甲板の塗装に入る。空母はこれが本体と言っても過言ではない。重要な箇所だ。
４４タン、軍艦の甲板によく使われる色で塗ったくるのだ。
後は艦載機もしっかり塗らないといけないし、他にも――
「指揮官。ちょっと良いですか？」
「ん？　綾波、どうした？　遠慮せずに入って来いよ」
綾波が扉越しに話しかけてくる。
「……そうですか。指揮官がそういうのなら」
……ん？
ちょっと待てよ。
さっき俺は綾波を何処へ向かわせたっけ……？
「……しゃんぷーとりんすの違いを教えて欲しいのですが」
「キャァーッ!!」
思わず女子のような悲鳴を上げてしまった俺の目には、一糸纏わぬ艦船の姿があった。
一瞬だったがはっきりと目に映ったのは、幼い表情に反して出る所は出て引っ込む所

は引っ込んでいながらもスレンダーさを保ったスポーティな少女の身体――思わず扉を閉めてしまった。
「ちょっと待てや！　せめて何か着てから聞きに来いよ！」
「……指揮官が遠慮せずに入って来いよ、と命令したのです」
少しだけ拗ねた口調でそう帰って来る。
嗚呼、俺の馬鹿！
プラモデルに熱中していて、直前の記憶が飛んでいた。
しかし彼女もわざわざ俺の部屋の前に来たのだから、せめて何か着ているだろうと不自然にも思わなかったのだ。
「家の中を全裸でうろつくな！　幾ら俺でも……男なんだからな！」
「……？　最後は分からないけど分かったのです」
「本当に分かったんだろうなぁ……」
取り合えず扉越しにシャンプーとリンス、ついでにボディソープの事を説明してやる。
重桜艦は横文字に弱いのだろうか。
というか、彼女は何処まで知識があるのか。
さっきも若干頬を赤らめていたので、恐らく俺が入って来いと言わなければ全裸で部

屋に入って来る事も無かったのだろうが、そっち方面への知識が無いのではないかという疑いが出て来る。
これは……俺が大分フォローを入れなければいけないのでは無かろうか。
知らん間に変な男にホイホイついて行ったりしてくれなければいいのだが。
「心配だ……」
艦船には人格や知識が備わっているという。
明石と話す限りは、それは疑いようのない事実だ。
しかし、綾波と話す限り――まだ彼女にはそれが完全に芽生えていないのではないかと思えてくる。
この辺りも明石に聞いてみるか。
手の掛かる妹のようなものだし――
「妹、か」
――そこで俺は筆を塗るのを止めてしまった。
思い出してしまえば、また曇天が胸に掛かっていた。
「さっきは失礼したのです」
そんな彼女の声で俺は我に返った。
無心になって作業していたら、何時の間にか一時間も経っていたらしい。

「いや、俺も悪かった……」
「指揮官が謝る事ないです」
「そうなんだけど……何か釈然としないなあ」
改めて、寝間着に着替えた綾波が部屋に入って来た。
「それより、この部屋にあるのは？」
「全部プラモデルだよ」
彼女は部屋中に飾られた多くのプラモデルに目を見張る。
確かに圧倒されるだろう。
部屋中にぎっしり詰まった艦船達の迫力は並大抵のものじゃない。
それは、俺が初めて訪れた「カゲロウ」で感じたものと同じはずだ。
「これは全部指揮官が作ったのですか？」
「ああ。今までで何隻作ったかなあ。駆逐艦軽巡重巡空母潜水艦……一通りの艦種は作ったけど」
ついつい早口で語ってしまったが、それだけ俺にとっては拘りの塊なのだ。
「……俺の宝物なんだよ」
色々あったけど、そうなると綾波も俺の宝物みたいなものか。
いや、物という範疇はとっくに超えているんだけども、俺が作った艦船には違いない。

「大切に、保管しているのですね。全部綺麗です」
「そりゃそうだ。手入れだって定期的にやってるし埃が付かないように部屋はきっちり掃除しているくらいさ」
そこまで言った時、俺は今作っている祥鳳の事を思い出す。
恐らくこのプラモデルは此処には並ばない。
綾波のように人型の艦船になるのだろう。
もしかすると、今此処に並んでいるプラモデルも――
「……指揮官？」
「いや、何でもないよ」
――分からない。
それが嫌なのか、自分でも分からない。
ＫＡＮ―ＳＥＮは確かに人智を越えた凄いものだ。
だけど、それを作る為にプラモデルを、自分の大切なものを使うのは俺の本意に則ったものなのだろうか。
「指揮官、これは水雷戦隊、です？」
「あ……ああ！　そうだね、川内に吹雪……三水戦だ。本当は此処に綾波も入るはずだったんだけど」

「そう、ですか――また、会いたいです」
「会いたい？」
「はい。かつて、一緒に居た仲間ですから」
懐かしむような、寂しいような、色々なものが綯交ぜの瞳。
揺れる彼女の目を覗くと、俺は頷いた。
「……俺にとっても、家族みたいなものだよ」
意味合いは違っても、きっとこの艦船達は俺と綾波にとっても大事なものであることには変わりない。
それだけは確かなんだ。
きっと、どんな形になってもそれは変わらないだろう。
不安が無いわけではないけど。
「ところで指揮官。寝る場所を教えてほしいのです」
「ああ、教えておかないといけなかったな。こっちに来てくれ」
空いていた部屋がある。
しばらく、使っていなかった部屋が。
「……一人、ですか？」
「え？　いや、そりゃそうだろ……お前、男女が二人でベッドに寝るのはマズいだろう、

色々と」
「そう、ですよね。ごめんなさい」
　どうしたのだろう。
　綾波の顔は何処か不安げだ。
「まさか、一人で寝るのが怖いとかじゃないよな？」
「……怖くないです」
「なら良いんだけど……」
　俺は空き部屋に彼女を案内した。
　ただの普通の何てことはない部屋だ。
　女の子が住んでいた部屋。
　ぬいぐるみが飾られ、ベッドが置かれ、小綺麗にされた部屋。
「指揮官。ひょっとして、他に住んでいる人が居るってことはないですよね？」
　流石の綾波も違和感を覚えたのだろう。
「居ない居ない。今此処に住んでいるのは俺だけだよ」
「家族、や姉妹……のようなものは居ないのですか？」
「遠くに居るんだ。俺一人だけ此処に住んでる。横須賀に住んでるおばさんのおかげで、お金の心配は要らないんだけど」

「会いたい、とか思わないのですか。綾波は思ってしまうのです」
まさか、と俺は笑って否定した。
「もし俺が会いに行ったら怒られてしまうからさ」
「……フクザツ、なのですね」
「そういうこと」
ＫＡＮ―ＳＥＮや艦船のプラモデルが過去の艦船を再現しているのならば。
俺のやっていることも過去の再現だと笑われるのだろうか。
「……俺も寝るか」
今考えても詮無き事だ。
やらねばならないことは、山積みになっているのだから。

●

「……奴らを炙り出す」
赤い炎が御簾の奥で舞った。
利根が消息を絶ったのは横須賀の港。
一緒に送り出した多数の認識艦船と共に皆撃沈されたとみて良い。
となれば、横須賀には何かが居るのは間違いないのだ。
「……人間に肩入れするＫＡＮ―ＳＥＮか、そうではないか……其処が問題ね」

「一つ、試してみる必要があります。餌で相手が釣れるか否か」
「そうね。彼女なら上手くやってくれるでしょう。走、攻、守、全てを併せ持った彼女なら」
にたぁ、と湿った笑みを浮かべた女の眼前に佇むのは一隻の艦船。
誰もが恐れる彼女達を恐れぬ数少ない存在だった。
「くれぐれも私達をがっかりさせないように」
御簾の奥から、幾つか透明なキューブが賽子のように転がった。
それを拾い上げた女は、自信に満ち溢れているようだった。
「私を誰だと思っているんだい？」
その表情は覆面ではっきりとは見えない。
しかし、正体不明の敵を相手を狩る自信ははっきりと併せ持っていた。
「利根は慢心するところがあったが、私は油断はしない。相手が例え駆逐艦一隻だとしても……跡形も無く蹂躙するのは「戦艦」の領分だ」